

第3回日本ウクライナ 地域経済文化フォーラム 〈パネルディスカッション〉

III Міжнародна науково-практична конференція ЯПОНСЬКО-УКРАЇНСЬКИЙ ФОРУМ З КУЛЬТУРИ І РЕГІОНАЛЬНОЇ ЕКОНОМІКИ

日時：2012年6月2日（土曜日）13：00開始

主催：日本ウクライナ地域経済文化フォーラム実行委員会

（神戸学院大学 岡部芳彦研究室・関西学院大学 市川文彦研究室）

共催：神戸学院大学経済学部

場所：神戸学院大学 有瀬キャンパス 特別会議室



第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

プログラム

第1セッション：経済・文化（13：10-14：10）

パネリスト：市川文彦氏（関西学院大学経済学部教授）

コージナ・アラ氏（地方自治アカデミー准教授，博士：行政学）

ゲラシコフ・セルゲイ氏（ドネツク工科大学助手，博士：日本文化研究）

司会：岡部芳彦氏（神戸学院大学経済学部准教授） 通訳者：ワリエワ・エリヴィラ氏

休憩（20分）

第2セッション：政治・外交（14：30-15：30）

挨拶：岡田豊基氏（神戸学院大学学長）

パネリスト：楠本祐一氏（外務省関西担当特命全権大使，政府代表，元駐ポーランド，元駐ウズベキスタン大使）

西村康稔氏（衆議院議員，元外務大臣政務官）

コージン・ボリス氏（元ウクライナ最高会議〔国会〕議員，ウクライナ海軍初代司令官）

司会：岡部芳彦氏（神戸学院大学経済学部准教授） 通訳者：ワリエワ・エリヴィラ氏

休憩（10分）

全体討議（15：40-16：20）

フロアーからの質疑（16：20-16：40）

閉会

日本ウクライナ地域経済文化フォーラムの概要

日本ウクライナ地域経済文化フォーラムは、3年前より、Institute of Informatics and Artificial Intelligence, Donetsk National Technical University と神戸学院大学岡部芳彦研究室・関西学院大学市川文彦研究室との共催で、日本・ウクライナの2国間関係だけではなく関西とドネツク州の地域間の学術交流というユニークなコンセプトで開催されてきた。

2009年2月、岡部芳彦がウクライナ東部のドネツクの State University of Informatics and Artificial Intelligence（現ドネツク工科大学 Institute of Informatics and Artificial Intelligence）を訪問し、学生対象に「日本経済の歴史的背景と今後展開」を講演した際、アナトリー・シェフチェンコ学長（当時）、イゴル・コズロフスキ准教授より日本とウクライナ間のフォーラム開催の提案があった。2010年3月、第1回日本ウクライナ地域経済文化フォーラムが2日に渡り、延べ500人以上の参加を得てドネツクにて開催された。日本から岡部、市川文彦関西学院大学教授や日本舞踊家桃宗靖松らが参加した。

2010年8月、キエフのウクライナ最高会議（国会）：国家建設・地方自治委員会において、国際シンポジウム「経済危機に打ち勝つ競争力」がコージン元最高会議議員、コージナ地方自治アカデミー准教授によって、在ウクライナ日本大使館関係者の出席を得て開催された。岡部が「日本経済の歴史的パースペクティブと展望」というタイトルで基調講演をし、コージン氏らにフォーラムへの協力を求めた。

2011年3月、東日本大震災直後に、キエフを訪問し、ウクライナ最高会議でオレクサンドル・オメルチェンコ議員（前キエフ市長）、シンチェンコ議員らに日本の現状を説明した。その後、ドネツクにて第2回日本ウクライナ地域経済文化フォーラムが開催された。市川教授、河野安雄・日本正武館館長（極真空手）、岡部らが参加した。アナトリー・ブリズニョク・ドネツク州知事（現：地域開発・住宅・建設大臣）とも会談し、地域間の経済協力について話

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

し合った。

2011年8月、独立20周年を迎えるウクライナを岡部が訪問し、元環境大臣イヴァン・ザヤツ最高会議議員(現チェルノブイリ事故対応・天然資源・環境政策委員会副委員長)と会談した。2012年2月には、第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム準備のため、岡部がドネツクとキエフを訪問した。ドネツクではシェフチェンコ学長とコズロフスキ准教授、ゲラシコフ博士とフォーラムに向けて準備会合を行った。キエフでは、日本大使館員と意見交換のほか、国家国境庁・ウクライナ内務省を表敬訪問し、ウクライナ正教会の最高指導者フィラレート総主教と会談した。その後、コージン氏とコージナ博士と最終的な打ち合わせを行った。

2012年6月、第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラムが、日ウ地域経済文化フォーラム実行委員会主催、神戸学院大学経済学部共催で、日本において初開催された。今回のフォーラムでは、経済・文化といった学術だけではなく、政治・外交にまで枠を広げて学際的なディスカッションが交わされた。今後も、幅広い議論を通じて、日本とウクライナの相互理解を促進し、両国の将来を展望してゆきたい。

<パネルディスカッション> 第1セッション テーマ：経済・文化

岡部 それでは開式にあたりまして、日本ウクライナ地域経済文化フォーラム共同主催者を代表いたしまして、わたくし神戸学院大学、岡部芳彦から簡単に開式の辞を述べさせていただきます。

コージン元最高会議議員はじめウクライナからの訪問団、ならびに楠本祐一外務省関西担当特命全権大使閣下、そしてご来場のみなさま。

本日は、第三回日本ウクライナ地域経済文化フォーラムにお越しいただき誠にありがとうございます。また3名のパネリストの他に、5名の日本在住のウクライナの方々にお越しいただきました。合わせて御礼申し上げます。

5年前にウクライナの地を踏みました時、まさか日本でこのフォーラムを開

催することになるとは思っても見ませんでした。しかし、ウクライナが世界有数の親日国である事を知り、またそれに応えることが出来ないかと思い続けて参りました。そして、この度、市川文彦関西学院大学教授のご協力、またパネリスト方々のご参加を得まして、神戸学院大学経済学部の共催を得て、開催へとき着けました。

昨年の東日本大震災以後、原子力災害という共通の体験により、それに関連するウクライナとの関係は増えました。しかし、まだまだ日本ではウクライナについては一般にはあまり知られておりません。実は、文化的にも、地政学的にも非常に多くの共通点を持っています。多くの皆様に本フォーラムを通じて、ウクライナについて少しでも理解を深めていただけるだけでも開催の意義があると思っております。

このフォーラムは、議題が経済・文化に加え、今回は政治・外交と、多分野にまたがる有識者が日本とウクライナについて自由に意見交換する非常にユニークな特徴を持っています。加えて日本ウクライナの2国間だけではなく、ウクライナの地方と関西との交流があげられます。国家間だけではなく、地域間の交流を行うことは今後の国際関係でも非常に重要であるとわたくしは考えております。また、本フォーラム開催によって、日本とウクライナとの友好とご縁が深まることを強く願っております。ご清聴ありがとうございました。

岡部 引き続き、岡部が司会をさせていただきます。それでは本日のパネリストをご紹介します。お手元のプログラムもご参照ください。

まずウクライナ側よりコージン・ボリス氏、元ウクライナ最高会議議員、ウクライナ海軍初代司令官、海軍中将。

コージナ・アラ氏、地方自治アカデミー准教授。

ゲラシコフ・セルゲイ氏、ドネツク工科大学助手。専門は日本文化研究。

それでは日本側をご紹介します。

楠本祐一氏、外務省関西担当特命全権大使、政府代表。元駐ポーランド、元

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

駐ウズベキスタン大使。

市川文彦氏，関西学院大学経済学部教授。

西村康稔氏，衆議院議員，元外務大臣政務官。なお，西村代議士は2時30分頃ご到着になります。

司会岡部芳彦，神戸学院大学経済学部准教授。通訳者ワリエワ・エリヴィラ氏，本学大学院所属，キルギスタン出身になります。

ワリエワ ワリエワです。お聞き苦しい点もあるかもしれませんがよろしくお願いたします。

岡部 なお通訳に関してですが，外務省旧ソ連課ご出身でロシア語が非常にご堪能な楠本大使もお越しですが，会議の進行上，基本的に日本側は日本語で，ウクライナ側はロシア語での議論をお願いしております。なお，会場の皆様にも少しご説明しておきますと，ウクライナにはウクライナ語がございますが通訳の関係上，やむを得ずロシア語での議論をお願いしております。申し訳ございませんが，あらかじめお断りしておきます。

くわえて，ご来場の皆様には，本フォーラムのパンフレットにウクライナの国の概要や歴史，地図などをつけております。特にウクライナ側パネリストから歴史などのご紹介があった場合や，議論をお聞きになる際のご参考にしていただければと思います。

それではまず日本側，ウクライナ側よりご挨拶を賜りたく思います。日本側を代表いたしまして楠本大使をお願いいたします。

楠本：皆さん，こんにちは。私は兵庫県を含む関西を担当しております楠本でございます（ロシア語「自分で訳します。」以下楠本氏はロシア語と日本語の両言語を使用）。

私はいつも関西と世界のことを考えておりまして，関西と世界の関係をどの

ように発展させようか考えております。今日は関西とウクライナのことを皆様と一緒に考えたいと思っております。

私は、ウクライナを3回訪問したことがあります。ウクライナは本当に素晴らしい国であります。ウクライナはヨーロッパの大国であります。ウクライナには強い産業のベースがあります。そしてまたウクライナは昔からの古い歴史、伝統のある国であります。そういうことでウクライナと日本の関係がもっともっと強力に強化されることを期待しております。そういうことでこのシンポジウムの開会にあたりまして、日本政府、そして外務省を代表いたしまして心からお祝いを申し上げたいと思います。どうかこのフォーラムを通じまして、日本とウクライナの相互理解が深まりまして、関係が強化をし、そして素晴らしい結果を生み出すことを期待しております。どうもありがとうございました。

岡部 どうもありがとうございます。それではウクライナ側よりコージン提督よろしく願いをいたします。

コージン 本日お越しいただいたみなさん、こんにちは。この度、ウクライナの代表として、天皇陛下及び日本の国民に心から尊敬の気持ちを表し、御礼を申し上げたいと思います。

我々にとって、日本は何世紀にもわたる歴史を持つ海洋国家であります。

そして、本学の岡部芳彦准教授にも、お招きいただきましたことを感謝しています。日出ずる国、日本に来ることができて、日本文化や歴史に触れ、そして本フォーラムに参加できることを楽しみにしていました。

ウクライナの国民は平和主義を尊重しており、日本と同じく核兵器保有権を放棄しました。これは、いかに我々が自由で民主的な国民であることを示しています。

日本とウクライナの間でお互いの歴史、文化、特徴などを尊重かつ関心を持ち、両国間関係も非常に将来性のあるものでもあると思います。

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

これからも、両国民の間における市民外交や友好関係、そして協力関係が深まっていくと確信しております。そして、IT、投資、天然資源などをめぐって二国間の経済関係が友好的な外交の基盤になると思います。

そして、こうした政治・経済・情報・軍事上の協力関係によって、両国の国民が自らの自由や強さを実感して欲しいと思います。

我々お互いの国民に栄光あらんことを強く願います。

岡部 それでは第1セッションを開始いたします。今回のディスカッションの形式について会場の皆様にご説明いたします。まずパネリストに5分程度お話しいただきます。通訳を介しますので一人あたり10分×3の30分、残りの30分はわたくしの司会のもと自由にディスカッションしていただきます。第1セッションのテーマは文化と経済です。

ご来場のみなさまも驚かれるかと思いますが、現在ウクライナの首都キエフには300軒から400軒の寿司が食べられるレストランがあるとされておりまして。また小学校の教科書では松尾芭蕉が取り上げられ、一部小学校では日本語の学習も選択できます。日本のアニメがウクライナの若者の間でも人気なのはいうまでもありませんが、首都キエフには剣道連盟もあります。我々日本人はあまりウクライナについて詳しくないのに、ウクライナではどうしてこんなに「日本」が人気があるのでしょうか？

そのあたりの謎を解くべく、まずドネツク工科大学のゲラシコフ博士よりお話しをお伺いしたく思います。

ゲラシコフ 本フォーラムにお集まりいただいた皆様、こんにちは。

おそらく現代の日本人にとっては、ウクライナは謎のようであるかもしれませんが。ところが、黒川祐次元在ウクライナ日本大使が自作に書いているように、「日本はウクライナを発見すべきです」。本日、わたくしは、経済ではなく、文化交流についてお話ししたいと思います。我々の文化は多くの共通点があり

ます。

第1に、1970年代からウクライナの首都キエフといにしへの都の京都、そして港町オデッサと横浜が姉妹都市です。ウクライナでは姉妹都市関係開設にちなんで、街中のおとりや公園などに記念名称をつけていました。こうした姉妹都市間の交流が未だに続いています。

第2に、我々2国の文化を、私は「騎士道」の文化という風に定義しています。というのは、お互いの歴史上、武士とコザック（中世期に農奴制の支配を逃れた、後に自国を守る兵士になった自由民）が果たした役割が重大だったからです。

第3に、我々は、お互い「ココロ」を大事にしている文化でもあります。日本の「ココロ」とウクライナの「セルツェ（心の意味）」は、我々の日常生活においても行動を決める大きな要因であるのです。

第4に、我々は、音楽好きという点においても、共通しています。日本人もウクライナ人も大の歌好きであり、民族楽器や踊りも大事にしています。

現在ウクライナにおける「日本」というものは、一方では非常に、馴染みのあることでもあります。他方、その知識と理解が深いとはとてもいえません。ウクライナでは日本文化祭が頻繁に行われており、中でも最も大きなイベントは、キエフの「日本の秋」やドネツク市の「日本の春」というものがあります。「なぜそんなに熱心なの？」という疑問に対しては、私は「我々みんな、それぞれの日本がある」と、いつも答えるのです。つまり、政治や経済に関心がないものは、アニメや文学、あるいはイケバナや空手などに引き付けられるでしょう。

他方、両国の遠距離や東西問題や、そしてウクライナ人の豊かな想像力などが、ウクライナに存在する「日本」というものが、単なる勝手なイメージに過ぎない何かになった——との結果を導けるでしょう。当然、そのイメージが本当の日本とは程遠い存在であり、日本に対する定着済みのステレオタイプであるのも、不思議ではありません。私は、よくこれを「日本の神話」と呼ぶので

す。

1. 日本とは、SONYやTOYOTAなどの「電子大国」である
2. 日本は、みんなアニメ好きで、ひたすら漫画を読んでいる
3. 日本は、「みんな頭がいい」
4. 日本とは、ゲイシャやサムライの国である
5. そして、日本は、「みんな茶道やイケバナができる」

こうした神話は、ウクライナ人の日本に対する感覚を形成させてしまうのです。結果として、全世代のウクライナ人までみんな、日本のことを「物の豊かさ」と心の要求が最適に調和する組み合わせ」としか認識していません。きっと、日本人も東ヨーロッパに対して勝手なイメージしか持っていないことでしょう。ここで、お断りしておきたいのが、ウクライナはロシアではなく、独自の歴史や多様な文化を持つ独特な国であるということです。

日本とウクライナの文化交流の現状は、特に武道の例でよく分かると思います。なぜなら、それが、もう一つの「日本の神話」を生み出したからです。その神話とは、「日本人は皆、武道をやっている」ということです。

ご承知のとおり、20世紀に日本の武道が全世界に広まって行き、ウクライナもそれから逃れることはできませんでした。わが国では、およそ150万人が武道に携わっています。これが、世界中でもなかなか高いレベルです。ドネツク武道協会のウェブ・サイトの調査では、「自衛スポーツの内、どれをやっていますか？」との質問に対して、回答者の26.7%が空手と答え、そして柔道、柔術や合気道がトップ10に入るなど、まさに日本の武道の人气が立証されたとも言えます。

こうしたウクライナにおける日本武道の人气が日本の先生方を驚かせることもあります。総合武道場日本正武館の河野安雄館長がおっしゃるとおり、今は武道の普及において、日本では道場の数なり、先生の人数なり、全ての条件が整ってはいますが、肝心なのは、現代日本人は武道に飽きてきていることでしょう。これに対して、西、つまり日本にとって、ウクライナは日が没す

る、西の国でしょうが、武道の発祥地である国、日本を追いかけることが動機付けになるのです。

ところが、ウクライナにおける武道の普及にあたっては、いくつかの問題点も指摘しなければなりません。

まず、営利的なファクターです。ウクライナを含めて海外での武道が、むしろある種のビジネスになりかけています。武道を、自己の収入源としか見ない先生も少なくありません。教える格闘技技術がエキゾチックなほど、収入も増えるものです。例えば、忍術を見てみましょう。忍術って一体何なのかもよく分からないウクライナの若者が、黒ずくめの服に身を包んだり、手裏剣をといだり、天井を歩く真似をしたりして、しかも決して安くはない料金を払っているのです。

次に、指導ファクターについてです。ウクライナの武道団体における指導のあり方は、画一的といってもいいほど、厳しく統制されています。例えば、ウクライナ合気道合気会 連合内の過剰な規律へのこだわりですとか、会員に対して新興宗教流の指導方式を取っているなどと、最近批判の声が高まっています。

文化ファクターです。ウクライナ人の先生方が、一般的に武道における哲学・精神・倫理的な局面を軽視しがちです。おそらくそれが日本語や日本の伝統、つまり日本文化全般に対する知識の浅さによるものなのでしょう。また遠距離により、日本のイメージが第三国、主に英語圏の国経由でしか知ることができません。

一般的に、ウクライナにおける日本文化の将来性は高いと思われませんが、大きな問題点もあります。この現状を、芥川竜之介の小説『芋粥』を利用してうまく説明できると思います。芋粥が食べたかった武士は、ある日その夢が叶ってお腹いっぱい食べたのですが、同時に今までに前向きにさせてくれる夢がなくなって困った、というストーリーみたいに、現在のウクライナ社会が、日本文化でだいぶ一杯になっているように見えるのですが、「食べ続けて」くれて

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

いる限り、夢がまだまだあるということでしょう。つまり、これからは、日本に対する知識が量的ではなく、質的次元になることを、切に願います。ご清聴、どうもありがとうございました。

岡部 ありがとうございました。非常にユニークな発表で我々日本人も知らないことがたくさんあったのではないかと思います。つづきまして、市川文彦教授とコーディネーターは経済学者です。お二人にはエコノミストの観点からそれぞれの国の経済、そして日本とウクライナの関係、あるいは感じている事についてお話いただけます。まず市川先生のほうからよろしく願いいたします。

市川 ただいまご紹介にあずかりました市川です。この第3回フォーラムは岡部芳彦準備委員長はじめ神戸学院大学の多大なご尽力により初めて日本で開催されますが、ウクライナから第1回、第2回フォーラム実施に多くの貢献をして下さったセルゲイ・ゲラシコフさんや、新たにコージンご夫妻をここ神戸へお迎えすることが出来て幸いに思います。また日本側メンバーとして外務大臣政務官のご経歴のある西村康稔代議士と楠本祐一関西担当特命全権大使に公務ご多忙の中、ご参加いただき、外交・国際政治の専門家としてのご所見をこの機会に伺いたく思います。

さてウクライナは我々の隣国ロシアの、さらに西側に位置する国です。人口は4500万人であり、東ヨーロッパではロシアに次ぐ大きな人口規模を誇っています。2008年秋のリーマンショック以降も、約4%の経済成長率を実現し続けており、ウクライナの消費市場は今後の国内所得水準の上昇と共にさらに広がる事が期待されます。つまりウクライナは日本企業、関西企業にとっての今後の確実なビジネス・チャンスの場となりうる存在です。

ウクライナと日本との経済協力関係は、JETRO（日本貿易振興機構）キエフ事務所が拠点となってウクライナへの日本側からの投資ミッションを組織化したり、貿易取引上の商談を促進しています。このような動きに関しては昨年

3月のウクライナ・ドネツク市で開かれた第2回の本フォーラムの際に私達がお目にかかった当時のブリズニューク・ドネツク州知事——現在は地域開発大臣となっております——も大きな期待を表明していたのが印象的でした。またJICA（国際協力事業団）も、キエフ市のウクライナ・日本センターへ貿易促進のため、また日本語学習のためのJICA専門家を派遣し続けてきたと共に、ウクライナ側から昨年度までに250名を超えるウクライナ人研修生を日本へ迎え入れております。

このように近年でのウクライナと日本との経済関係が強化されようとするのは喜ばしい状況です。それと同時に、まだまだ近畿地区ではウクライナが身近な存在になっておりません。今後、キエフ首都圏、ドネツク地方と、ここ近畿地方の地域企業同士がお互いにビジネス・チャンスを見出していく可能性が広がってくると思います。これからお話しするのは、実は司会の岡部先生の持論であり、昨年の本フォーラムでの岡部報告にて、問題提起された論点と重なります。ドネツク市でも、間もなくこの6月にポーランドとの共同開催でサッカーのヨーロッパカップ大会が催されますが、これもきっかけにしながら博覧会のようなBig Eventも設定してツーリズム、観光産業がウクライナでのニュー・インダストリーとして発展していく可能性をもつと思われます。また日本側はマンガやアニメなど“Cool Japan”（カッコいい日本）を代表するコンテンツ産業を、大マンガ家手塚治虫氏を生んだ近畿の企業も関与しながら、ウクライナへ輸出していくことができるかと思えます。

このセッションのテーマは経済と文化ですが、この二つの側面を共に支えるのは意欲ある人材の確保とその育成です。2010年の第1回、2011年の第2回フォーラムはドネツク市の国立情報科学大学で開催され、これへ参加の機会を得ました。実に印象的であったのは、セルゲイさんが代表を務める大学内の「アマテラス・センター」に多くの日本文化、社会、日本語に関心を寄せるウクライナの学生諸君が集まって意欲をもって学習をしている姿でした。本フォーラムへは首都キエフから遠路わざわざ夜行列車に乗って参加した熱意溢れる女子学生

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

もりました。また来週にはセルゲイ先生やアラ・コージナ先生を関西学院大学にお迎えます。コージナ先生には経済学部生へ「ウクライナ，そのブランド力と発展の潜在性」という実に魅力的なテーマで特別講義をして頂きます。このように本フォーラムはウクライナと日本の若者たちへ刺激を与えて相互認識を深めていく機会をもたらすものでもあり，本フォーラムのこのような役割を再認識しながら，私は両国の関係が一層近づいていけばと念じております。どうもご清聴ありがとうございました。

岡部 市川先生どうもありがとうございました。それでは同じく経済学者の目からアラ・コージナ博士よろしく願いいたします。



コージナ 日本ウクライナ地域経済文化フォーラムの参加者の皆さん，こんにちは。本日はご報告させていただき，大変光栄に存じます。特にこの場を借りて，二国間関係の強化及び本フォーラムの開催にあたって力を尽くしてくれた神戸学院大学の岡部准教授にお礼を申し上げます。短い発表になりますが，ウ

クライナ経済の現状，時事問題，今後の課題及び二国間の経済関係の展望についてお話ししていきたいと思います。

まず，日本ではウクライナという国自体，まして経済特徴が意外と知られていないことから始めたいと思います。勿論，つい最近まで経済成長においては世界ランキング3位であった日本から見れば，GDP世界ランキング39位であるウクライナはあまり知られていないのも当然のはずです。

しかし，ウクライナは地理的に有利な位置であり，WTO（世界貿易機関）加盟国でもあるなど，かなりの経済力を持つのです。輸出がGDPに占める割合が50%という輸出主導型経済モデルのため，外需に依存しております。農業国として様々な農産物を輸出しており，グローバル食料安定供給において重要な役割も果たしています。例えば，ひまわりの種やひまわり油の輸出量は世界ナンバーワンであり，その生産も世界二位です。また，穀物輸出国世界トップ3に入っており，大麦輸出量は世界一です。

ウクライナは工業においても十分な知的・技術能力があり，重機械工業，鉄鋼・非鉄冶金，造船，自動車，航空機製作，発電所用設備の製作等のような工業も盛んです。また，航空機からモーターエンジン，水力発電設備，農業機械まで，とブランド力を持つハイテクメーカーも数多くあります。ウクライナは相当な発電能力もあり，また宇宙船や人工衛星，宇宙探査設備，多種類の兵器（戦車，輸送機，ミサイルシステム），光学器械の製作も盛んです。

しかし，こうした高い経済力を持っているにもかかわらず，多くの問題点も存在しています。すでに申し上げたように，ウクライナは輸出主導型経済であり，しかもその構造は主にローテクかつ非多様性生産であります。それがゆえに，わが国経済がグローバル市場のニーズに左右されやすく，国内市場を形成する必要があります。さらに，ウクライナでは全面的な権力乱用の下にエネルギー・資源集約的な経済構造が構築されており，高度技術及び運営能力が欠けているといってもよいです。

両国間関係についてですが，現在はあまり活発でないことを認めざるを得ま

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

せん。2009年時点では、在ウクライナ日系企業数は11しかなく、日本ウクライナの交流はまだまだ進展の余地があります。2国間は遠距離にもかかわらず、お互いの歴史や文化などに対する関心があり、今後とも年々高まっていく可能性が十分あります。

ご承知の通り、我々は原発事故を経験した二カ国でもあります。本年、福島・チェルノブイリ原発事故の後処理上の協力条約が調印された。ODA（政府開発援助）による資金はウクライナの保健・文化・インフラなどの維持に向けられており、その額はチェルノブイリ原発事故の後処理だけで1億米ドルに及んでいます。ウクライナにとってはこうした援助が非常に役立っており、感謝しています。

両国関係の今後の方向性においては、省エネ、環境、発電などが最も有望であると考えられます。例えば、我々は、京都議定書枠内で日本に温室排気ガスの自国割り当てを売っています。これによってウクライナが受け取る資金は、環境問題や省エネ技術開発などのような様々なプロジェクトに配分されます。

食料生産におけるお互いへの関心は、日本がウクライナのとうもろこしや酪農品、そしてウクライナが日本の水産物となっています。将来的には、宇宙技術における協力関係も有望であると思われます。

日本にとっては、地政学的に有利な位置にあるウクライナが今後とも魅力的であろうことから、多岐に渡る分野での協力が見込まれます。我々は、日本の投資家達がEUやCIS諸国に近い、豊富な生産要素及び熟練した人材を持つウクライナ経済への関心を高めていくことを願います。短い発表でしたがありがとうございました。

岡部 どうもありがとうございました。実は、このフォーラムではディスカッション形式というのは初めてで、時間の配分が難しく、すでに残りが5分ぐらいしかありません。ただ、全体ディスカッションが最後にありますので、そこで再びやっていただきたいと思います、少し短い質問を3名の方にさせてい

たきます。

経済と文化を一気に議論するのは難しいのではないかと思います、3人をまとめますと人と人との交流が重要だということは共通しているのではないかと思います。そこで市川先生とアラ先生にお聞きします。手短で結構ですので、どの分野の交流が一番重要と思われるか教えていただきたいと思います。そしてセルゲイさんにも一つ質問があるのですが、今日は会場に50名あまりの日本人がお越しです。あまりウクライナについて知られていないとおっしゃっていただきましたが、ウクライナについて一番知ってほしい物を一つ挙げていただきたいと思います。

市川 ただいまの岡部先生からのお尋ねですが、先ほどのアラ・コージナ先生のプレゼンテーションにもあったこれからウクライナが伸びている分野での協力だと思うのですね。つまり環境問題、エネルギー、資源とかそういったところがすごく大事で、あとは岡部先生と私の持論であるツーリズムとかイベントなどを設定して人と人との交流に関わる色々な産業を育てていくということではないかと思います。

コージナ 私も市川先生と全く同感です。すでに申し上げましたとおり、環境、省エネ技術開発といった分野が重要ではないかと思います。そしてもっとも重要と思われる分野の一つが文化交流だと思います。

岡部 ありがとうございます。それではセルゲイさん、パネリストだけではなく、会場の皆様にもぜひウクライナを宣伝していただきたく思います。

ゲラシコフ もちろん、ぜひ知ってほしいものがたくさんありますが、百聞は一見にしかずと言われているとおり、ウクライナに来て、自分で確かめていただくことです。前の質問にお答えになったお二人と全く同感です。お互いのビ

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

ビジネス関係、文化交流がこれから伸びていくのではないかと思います。皆さんが機会がありましたらウクライナに来てください。

岡部 どうもありがとうございました。皆様それぞれの袋の中に、ウクライナのパネリストのお土産でチョコレートが一粒入っております。ちょうど休憩に入りますのでお食べいただければと思います。

終了前に一つ告知がございます。本フォーラムの関連行事といたしまして、ただいまのセッションで日本文化また武道への熱い思いをお話いただきました合気道2段のセルゲイ・ゲラシコフ博士を歓迎して、本学合気道部顧問の山崎昭彦さま、ならびに前顧問草野栄養学部名誉教授のご厚意で、本学合気道部とドネツク工科大学合同稽古がございます。明朝10:00から本学武道場にて開催されます。どなたでもご覧いただけますので、ご興味をお持ちになられました方はぜひご覧いただければ幸いです。なお、本学合気道部も部員募集中でございます。学生の皆様でご興味お持ちの方はお尋ねいただければ幸いです。

それでは、ちょうど西村康稔代議士もご到着されたところで、休憩に入ります。

<パネルディスカッション> 第2セッション テーマ：政治・外交

岡部 それでは定刻が参りましたので再開をさせていただきたく思います。さきほど神戸学院大学岡田豊基学長がご到着されました。神戸学院大学を代表いたしますして、皆様に歓迎のご挨拶をいただきます。

岡田 皆さん、こんにちは。只今ご紹介に預かりました、神戸学院大学学長の岡田でございます。第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラムの開催、誠にありがとうございます。フォーラム開催にあたり大学を代表してご挨拶申し上げます。

まずは、コージン元最高会議議員はじめウクライナ代表団の皆様、ならびに



学長室にて

楠本駐関西特命全権大使，西村代議士，そしてご来場の皆様，ようこそ，神戸学院大学へお越しいただきました。心より歓迎申し上げます。

今から2年ほど前，ウクライナ出張から帰られました本学経済学部・岡部准教授からお土産をいただきました。それは高級なウォッカでありまして，学長室に大事にとっております。その際，フランスの文豪オノレ・ド・バルザックも晩年はウクライナで過ごしたことを知りました。それほど魅力のあるウクライナはどのような国なのかと思っておりましたところ，本学にて，このフォーラムが開催されると伺いました。このフォーラムは日本では初めての開催とのことで，本学にとりまして誠に名誉でございます。

ウクライナと日本は文化や考え方など相通ずる部分が多いと聞いております。このフォーラムを通じて，両国がお互いに理解を深め，さらなる交流が進展することを願っております。また，このフォーラムは2国間だけではなく，関西とドネツク州の地域間交流も目的の一つだと伺っております。本学のモットーは「元気の大学，神戸学院！」でございます。このフォーラムの開催で，お互いにますます元気になることを祈念いたします。

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

今年、神戸学院大学と同附属高等学校を運営しております学校法人神戸学院が創立100周年を迎えました。今後は、この壁に掲げられております建学の精神「真理愛好・個性尊重」の下、7つの学部、8つの大学院、1万人の学生を擁する総合大学としての特徴を生かし、教育・研究の充実化・活性化を図って参る所存でございます。そして、このフォーラムを通じて、世界に発信できる大学になればと思います。

それでは、パネリストをはじめいたします皆様の熱心なご議論を期待して、ご挨拶いたします。本日は誠にありがとうございます。

岡部 それではキエフ市在住のコージン氏からキエフ市の紋章を岡田学長に贈呈いたします。

コージン 神戸学院大学岡田学長にウクライナを代表してキエフの紋章をお贈りしたいと思います。この紋章に我々の心を込めております。お互いの関係が深まっていくことを祈念しております。

岡部 セルゲイ博士からも、神戸学院が100周年を迎えるということで、校章と似た像を贈りたいとのことでした。

ゲラシコフ 本年神戸学院は100周年記念と伺っておりまして、大学の校章が「かもめ」とお聞きし、それに似た像を贈りたく思います。これからますますお互いの交流が深まっていくことを祈ります。

岡部 ありがとうございます。それではお待ちをいたしました。第2セッションを開始させていただきます。テーマは政治と外交です。政治と外交と言いましても非常に幅が広いです。

あまり微妙な政治的なテーマは敢えて避けていただきまして構いませんが、

この場はあくまでもディスカッションですので公式な見解を表明する場ではありません。ですから、あまり堅苦しくなく自由に意見交換、フォーラムという呼び名にふさわしい「語り合う場」になればと思います。ただ話題の中心は日本とウクライナだということだけは、あらためてお願いいたします。

まずウクライナですが2004年にオレンジ革命というのがありましてウクライナが世界的に脚光を浴びたことは覚えていらっしゃる方も多いかと思います。ただその後のウクライナの状況というのはあまり日本では知られていません。第2セッションの最初のスピーカーは、コージン・ボリス元ウクライナ最高会議議員からお話しいただきます。国や歴史的背景などを交えつつ、ウクライナの現状についてお話しさせていただきたいと思います。特に今後の日本とウクライナの関係がどのようになっていくのかもお話しいただければ幸いです。持ち時間は5分をお願いいたします。

コージン お集まりくださった皆さん、早速発表に移りたいと思います。

ウクライナは、法律に基づく、自由で独立した民主的国家であります。ヨーロッパ圏内最大国の一つで、総面積が60万4,000平方キロメートルであり、人口は4,600万人です。黒海及びアゾフ海に囲まれています。主な宗教はキリスト教です。

現在のウクライナの領土に当たる地域、ザポリージャ市では、紀元前3万5千年にさかのぼる古代人の居住地が発見されています。また同地域では、紀元前2万5千年前の古代遺跡も発見されました。

10世紀に現ウクライナの領土の地域では、キエフ・ルーシという強大な国家がかつて存在していました。中世期時代に3世紀にもわたってザポリージャ・シーチというコザック国家がありました。コザック国家の最高統治者は、皆に選ばれたヘーチマンと呼ばれる隊長でした。

ウクライナは、歴史上の偉大なる人物の出身国でもあります。例えば、ヴラディミル大公やウクライナ独立戦争に大活躍したヘーチマンのボグダン・フメ

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

リニツキー、世界古典文学に入る、ウクライナの国民詩人とも呼ばれるタラス・シェフチェンコなどです。

同時に、ウクライナは宇宙技術大国でもあり、宇宙ステーションへの打ち上げロケットや有名な輸送航空機ルスランやアントノフ、船舶、戦車、兵器までも作っています。

ウクライナは、ピサンカと呼ばれる復活祭のイースターエッグ、カラフルな刺繍入りの民族衣装、コリャードキと呼ばれる近所を回りながら歌われる新年挨拶の歌の国でありながらも、同時にサッカーが強く、プロ・ボクシングの世界チャンピオンのクリチコ兄弟の国でもあります。そして、今年ヨーロッパサッカー選手権 EURO2012 の開催国です。

ソ連の崩壊後に、わが国はオープンな市民社会および自由で民主的な国家を建設する方針をとりました。ロシアとは、平等かつお互いに有益になるような関係を築こうと心がけていますが、今のところはすべてがうまく行っているとは言いがたい状況です。

ウクライナは自らの陸海空軍を持っており、独自で防衛できます。かつて核兵器保有国ではありましたが、みずからその保有権を放棄し、その代わりに国連やアメリカ、ロシア、イギリスから安全を保障されました。

1996年にウクライナは独自の憲法を採択しました。憲法17条では、「ウクライナ国内においては、外国の軍事基地の駐留が禁止される」という風に書いてありますが、現在はロシアの黒海艦隊駐留問題が未だに解決されていません。

国政においては、多くの問題点が存在しています。国内政治勢力が方針変更をしつつ、統一化を図ろうとしています。この秋にわが国は最高会議、つまり国会の選挙を控えており、これにウクライナの更なる民主化への期待が大いにかかっています。そして、2015年に予定される大統領選挙が民主化過程における決定的な節目になり得るとも思われます。

日本とウクライナの協力関係の進展から判断すると、市民外交による両国間の関係が、これからも深まっていくと思います。具体的な例として、ウクライ

ナ的首都キエフと京都の姉妹都市としての協力関係や、お互いの教育機関の間の協定や、そして本フォーラムも挙げられます。

ウクライナでは日本ウクライナ友好センターが積極的に活躍しています。そして、この場を借りて、参加者の皆様の一つ提案をしたいと思います。ここ神戸に、我々の力で新たな日本ウクライナ友好会、名づけて「キエフ・神戸」を開設するのはいかがでしょうか（フロアーから拍手）。

こうした、全面にわたる両国の協力関係により、将来的に我々がともに経験した原発事故を未然に防げる技術が登場することを願います。ご清聴ありがとうございました。

岡部 どうもありがとうございました。つづきまして、西村康稔代議士にご発言をお願いしたいと思います。ウェブサイトなどを見ておりますと西村代議士は非常に諸外国とのコネクションをお持ちです。今日来ていただいたから言うわけではありませんが、わたくしは個人的には日本で「一番首相になるご準備をされている政治家」と思っています。（ウクライナ側パネリストより拍手）ウクライナについては外務大臣政務官時代にユリヤ・ティモシェンコ首相にお会いになったり、また一昨年もウクライナをご訪問されています。それらのご経験を踏まえてよろしく願いいたします。

西村 大変、過分なご紹介をいただいて光栄です。ちょうど神戸学院大学がある神戸市西区の隣の海側の明石市と海を越えた淡路島は私の選挙区で、そこから国会に送っていただいております。こちら神戸学院大学の多くの学生が明石駅を使っている関係もあって地元の大学だというふうに思っております。今日こうしてウクライナとの地域経済文化フォーラムに、私が外務大臣政務官のときにウクライナを担当しましたご縁で、岡部先生からお声掛けをいただいて本当に感謝をしております。すでに話題に上っているのだと思いますが、当時私がウクライナで学んだことは赤いスープのボルシチが、ウクライナがもともと

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

の発祥の地であること、それからキエフで大変美味しくいただきました鳥のカツレツ、キエフのカツレツは日本人にぴったりの料理だと思います。それから私の子供のころ、40年ほど前ですが日本人の好きな物3つがよく言われておりました。「巨人、大鵬、玉子焼き」。巨人というのはプロ野球のチームです。大鵬というのは、当時の横綱で、一番強い力士・相撲取りで、お父さんがウクライナ人だったんですね。3番目、玉子焼きは卵です。本当はたぶんその時の日本人にはもう一つ好きなものがある、それは私の属する自民党だったと思います。

今日は政治の話なので、政治の話に移りますけれども、私の属する自民党はずっと選挙を通じて民主主義の中で政権を50年以上にわたって維持してきた政党であります。私が国会議員になってから8、9年になります。実は2年前に政権を失って野党の立場です。余計なことですが次の選挙では与党に戻るかと思いますが、国会議員になった当時、6、7年前に統一ロシアの人たちがよく自民党の政治の仕組みを勉強に来られました。それは選挙をずっとやっているのになぜ50年間を通じて、選挙に勝ちつづけて与党であったのかということも勉強されに来られました。ウクライナ最高会議議員の方に何人かお会いして同じような質問を受けたことがあります。その話は今日の話の中心話題ではありませんのでまた別の機会に話したいと思いますが、2009年3月にティモシェンコ首相を空港まで迎えに行きまして、その後朝食会も一緒しました。翌年の2010年の9月にキエフを訪問しました。あるいは先月はリトヴィン（最高会議）議長が日本に来られて食事をご一緒しました。そうした経験を通じてウクライナの印象を二つだけ、まず申し上げて最初のお話を終わりたいと思います。

一つは洗練された落ち着いた豊かな国だということです。もともと鉄鋼業は盛んですし、農産物も輸出をする農業大国です。豊かな文化もあり、ソフィア聖堂、ペチェルスカ修道院も訪問しましたが、素晴らしい世界遺産だと思います。その印象と、もう一つの印象が、その大国が悩んでいる、「悩める大国」、別の言い方をすれば「分岐点に立つ大国」です。これはまた後ほど議論

の中でお話しさせていただければと思います。ロシアとヨーロッパの間であり、非常に地政学的に重要な位置にあります。双方の影響を受け、双方との関係を維持していかないといけないという難しい中で、いま悩んでおられるのだと思います。これは日本も似たような状況で、アメリカと中国、二つの大国とどう関係を維持するかという難しい立場に、いま日本もあります。あるいはロシアとアメリカ、その間に同じように日本は位置しています。そうした同じような立場で、どうやって両方との関係を維持していくか、まあ、私はハイブリッド国家、ハイブリッド外交という言い方をしていますけれども、それが出来るかどうかだと思います。5分15秒になったので終わりたいと思います。

岡部 どうもありがとうございました。それではここで、楠本大使にご発言いただきたいと思います。ただいまお二人のお話しをお聞きになった上で、今後の日本とウクライナの関係、あるいは両国の将来や可能性について外交官の視点・立場からご自由にご発言いただければ幸いです。

楠本 私が外務省に入りました時は国際情勢は非常に単純でありました。その時には世界には二つのグループしかありませんでした。一つはアメリカを軸にする資本主義グループ、一つはソ連を軸にする社会主義グループでありました。しかしながら約20年前、アメリカとロシアとの間の冷戦が終結をし、ソ連が崩壊をするという大きな事件が起きました。わたしはこの事件の後ですね、世界情勢が大きく変わったと思います。現在はグローバリゼーションの時代と言われています。ということは世界中に国境を越えて、人、モノ、金が自由に溢れています。しかしながら、このグローバリゼーションが進むというのは良い面と悪い面があります。プラス面は、経済成長をもたらします。中国がいい例だと思います。しかしながらこのグローバリゼーションはマイナスの面ももたらしめています。

それは格差の拡大ということです。一つの国の中では豊かな人と貧しい人、

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

世界の国の中では豊かな国と貧しい国、こういう大きな差が起っておりまして。この点はマイナスだと思います。この点で、私は日本とウクライナの関係につきましても、こういう国際社会の中で起っている事を十分に考慮しないといけないと思います。そういう観点から私は外交の観点からそういった複雑な国際状況の中で、日本外交がやるべき点というのは三つあると思います。一つの方向は平和外交だと思います。日本は、もっともっと世界の平和と安定のために貢献すべきであります。これが一つの方向であります。そして二つ目の方向は、経済外交。これは世界の経済をもっと安定させて経済成長のための土台をつくる、世界中の人が豊かにそして幸せなコンディションを作っていく、そういうことだと思います。三番目は文化外交。これは今日もいろいろお話しになりましたけれど、世界中が日本の文化に関心を持っております。そういうことで私は文化の面でも外交をして貢献すべきだと思います。私が申し上げた、平和外交、経済外交、文化外交では、日本とウクライナは協力する面がいっぱいあると思います。

もう少し日本とウクライナの関係について数点お話しをしたいと思います。何人かの方がおっしゃいましたけれども、やはり2国間の関係をもっと強化する必要があります。そのためには政治対話、外交対話が非常に重要です。特にハイレベルでの対話が非常に重要です。こちらにおられる西村先生は外務省の政務官で非常に貢献いただいたことで、私も外務省として非常に有り難く思います。ウクライナから大統領や首相をお迎えしましたけれども、残念ながら日本からはあまり日本の議員や閣僚が行っていないと思いますので、今後日本の要人がウクライナを訪問すべきかと思います。

そのほかに私は日本にとってウクライナとの関係で一番重要なのは、ウクライナが安定した豊かなウクライナになることを引き続き支援をする事だと思います。まだ現在もウクライナというのは、移行経済の途中を一生懸命努力されていると思います。これは私はまずメンタリティを変えないとならないし、システムを変えないとならないし、非常に難しいと思います。そういうことで、

私は日本がもっともっと、そういう意味で人材の育成だとか、システムの変更といった面で貢献ができればというふうに思いますし、これは日本の政治だけではなく、皆と一緒にオールジャパンでやっていくべきだと思います。

最後に、これは西村先生もおっしゃいましたが、日本とウクライナの関係というのは両国関係だけではなくて、日本がウクライナを助けるということは、日本とロシアとの関係、日本とEUとの関係、さらに日本とアメリカの関係にもすごくいい影響を及ぼすと思います。そういうことで私はもう一度最後に日本とウクライナの関係は、外交の観点から非常に重要だということを強調してお話しを終えたいと思います。どうもありがとうございました。

岡部 どうもありがとうございました。楠本大使にお越しいただきましたということも非常にありがたかったんですが、何よりもご自分ですべて（日本語とロシア語で）お話しいただいてこれ以上ありがたいことはないかと思います。ワリエワさんと私から改めて御礼申し上げます。

それではお二人の政治家とロシア語がご堪能な外交官からご発言いただきましたので、わざわざ私からサジェスチョンすることはないかと思うのですが、一言だけ言いますと西村議員の方から出ました「悩める大国」、ウクライナと日本は同じような立場だという意見が出されました。そこでまず最初に一つだけわたくしから質問をコージン元議員にさせていただいて、あとはご質問されたい方からする形にさせていただければと思います。ロシアとアメリカ、大国の中で生きているウクライナから見て日本に助言、あるいは日本に助言してほしいということがもしあればお聞きをしてみたいと思います。

コージン もちろん助言はあります。また助言したいことを今我々は実行しています。まず何より、ロシアという大国とお互いの国にとって有益となる関係を保つことです。同じく旧ソ連に属した2か国なので、お互いの関係は平等かつお互いの尊重に基づかねばならないと思います。我が国ウクライナは、ロシ

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

アが兄とすれば弟のような関係ではなく、平等な関係で交流を進めなければならないと思います。今のところは、極力そのように心がけていますが、全てがうまくいっているとは言えません。ですので、これからはウクライナとロシアとの関係は平等に基づいて発展することを願います。

そしてこれからのウクライナの発展に重要なもう一つの方向性としては、民主化過程を進めることです。そのため、先進国の経験を生かしながら民主化過程を進めていきたいと思います。そして最後に大事なことはオープンな市民社会を築くことだと思います。

岡部 どうもありがとうございます。今コージン氏からお答えがありましたが、どなたからでもご発言いただきたいと思います。それでは西村代議士よろしく願いいたします。



西村 政治家の先輩であるコージンさんから素晴らしいご発言をいただきました。これは人類共通の価値だと思いますが民主主義、法の支配、自由主義、こ

うした価値を大事にしながらか国の文化を大事にするというのが国の基本だと思ひます。ぜひ、そうした方向でウクライナが新しい国造りに進んでいくことを期待したいと思ひます。オレンジ革命で、一ランク民主主義のレベルが上がったと思ひますが、さらに上があると思ひます。来週サッカーのヨーロッパ選手権がキエフを中心に開かれます。ものすごい熱気に包まれると思ひますが、ヨーロッパとの関係も深まると思ひます。10月には国会の選挙もあります。前のオレンジ革命との違いはソーシャルメディア、携帯をはじめとする新しいネット社会が進展していることです。そのことがアラブの春を生んだんだと思ひます。暴力に訴えることなく選挙を通じて新たなステップに進むことを期待しております。

最後に、日本もそうですし、ウクライナもそうですし、すべての国もそうですが、政治の安定というのがすごく大事だと思ひます。日本もいま政治が少し混乱をしています。おそらく1年以内に衆議院選挙があり、来年7月には参議院選挙がありますので、ぜひ日本も安定的な政権を1年以内に作りたいと思ひています。その上で安定した国同士の成熟した良い関係を作っていきたいと思ひます。スパシーバ。

岡部 ありがとうございます。コージン氏からもお答えがあると思うのですが、先に楠本大使からお一言ご感想やウクライナについてお話しをいただいて、最後にコージンさんにもう一度お話しただこうと思ひます。もしよろしければワリエワさんの休憩になりますのでロシア語でお話しただければと思ひます。

楠本 日本ウクライナ関係が現状では十分ではなくて、もっと発展させるべきだというのは同じような考えです。その意味で例えば今日お話しもでたツーリズム、観光とか日本の会社の投資を呼ぶというのは非常に重要な方策だと思ひます。しかしながら、観光客や日本からの投資を呼び込むためには、受入国としてウクライナにいい条件、いい環境を作っていただく必要がどうしても大事

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

だと思います。そういうことでこの機会に、すべての皆さんが日本とウクライナの関係が重要だということは分かっているわけですから、日本からもっとたくさんの観光客が行きたい、もっとたくさんの日本の会社が投資したいと思うようなぜひ素晴らしい条件をウクライナに作っていただきたいと思います。ありがとうございます。

岡部 ありがとうございます。少し時間が押しておりますので、コージンさんから手短かにウクライナ側のお話しをお聞きしたいと思います。

コージン もちろんあります。まずもっとも印象的なのは、お二方の発言を聞いて大変興味深く、今日はそのことで一日中頭がいっぱいになると思います。まず、日本が非常に親ウクライナであることに感謝しています。そしてウクライナがさらなる発展するためのさまざまな助言を教えていただきありがたく思います。本日のフォーラムのパネリストの皆様の発表を聞いて、それをすべてメモし、帰国してからウクライナの人々に伝えたいと思います。

岡部 どうもありがとうございました。時間が参りましたので、5分休憩で、50分から全体討議に移りたいと思います。

全体討議

岡部 それでは全体討議に移らせていただきます。現在55分ですので、少し少ないですが30分程度お話しさせていただいて、後にフロアからの質疑応答とさせていただきます。

経済・文化、政治・外交とまったく分野の違う専門家が一同に会しています。各専門家が2国間関係について議論するというのは非常に珍しいことかと思えます。

まず最初に、わたくしから共通の質問をさせていただきます。その後、ご質

問したい相手を指名していただくか、共通の話題をお出しただいて、それについて議論を進めようと思っております。その場合はどなたからでも結構です。

まず共通の質問から始めます。日本側パネリストには、ウクライナに期待すること、ウクライナ側のパネリストには日本に期待することをお一言ずつ、1分程度お答えください。少し抽象的ですが、分野は問いません。両国関係でもあるいは世界における役割など思いつくままで結構ですのご発言いただければと思います。

自由なディスカッションですのでワリエワさんが聞き返すかもしれませんがご了承ください。それではウクライナ側から始めたいと思います。まずはアラさんからお願いをいたします。

コージナ まず本フォーラムに参加でき本当にうれしいです。ウクライナは、日本からの投資及び技術に関して高い関心を持っております。そして我々2か国の関係においてはそれぞれの教育機関における協定、文化交流における人的交流が重要だと思えます。

岡部 続いてセルゲイさんお願いします。

ゲラシコフ これからの我々2国間関係が量的ではなく質的な次元でますます深まっていくことを期待しています。そして2国間関係が国家間のハイレベルな関係だけでなく、地域間の協力関係であることをお願いしたく思います。具体的な例としては在ウクライナの日本人は約180名が住んでおりまして、その3分の1が首都キエフに住んでいます。私が住んでいるドネツク市には、私の知る限り1人の日本の方が住んでいます。なので、そういった日本の関係が首都キエフに集中するのではなく地方にも広がっていくことをお願いしたく思います。最後に、本日のフォーラムがお互いの交流が深まっていくことを促進し、第一歩となることを願います。

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

コージン 3つの質問を1分でします。これからの期待のその1は2国間関係が市民協力から促進していくことを願います。そして日本側に期待しているその2はIT、投資などです。これからお互いの協力関係の最も重要な方向性として、政治、経済、情報、農業といった分野が活発になっていくことを願います。ご清聴ありがとうございました。

岡部 ウクライナ側からの日本への熱い期待をお聞きいただいたかと思いますが、日本側の順番は指定いたしません、どなたからでも…（西村代議士挙手）、それではお願いいたします。

西村 日本から投資、それから技術移転、観光、地域の交流、素晴らしいご提案だと思います。多くは繰り返しません、民主主義と政治の安定が重要だと思います。一点だけ観光について申し上げたいと思います。日本のゆとりのあるお年寄り、海外旅行が大好きです。ロンドンとパリにはよく行ってもう飽きています。ここ数年はクロアチアに毎年10万人以上の日本人の観光客が訪れています。これは日本の航空会社のJALの努力、チャーター便を飛ばすなどの努力もあって実現しています。私はウクライナはクロアチアに負けないさきほど申し上げた世界遺産もありますし、素晴らしい綺麗な町、国だと思いますので、クロアチアも少し飽きてきましたので、東の方に少しずつ、JALもそのようなことを考えているようですが、ぜひウクライナに多くの人がいくように私も努力したいと思いますし、いろんな企画を立てていければと思います。

岡部 ありがとうございました。それでは大使、お願いいたします。

楠本 ウクライナ側に何を期待するか、私も政治的な安定、経済的な安定性だと思います。政治的な安定は内政問題です、ウクライナの運命を切り開くのは、まさにウクライナの皆さん方だと思います。経済的な安定は、我々として

も引き続き協力をさせていただきたいと思います。しかしながら、もしウクライナ側の方で必要事項のプライオリティを付けて具体的に我々に提示いただければ、より我々として迅速に経済協力ができるのではないかと思います。そしてまたウクライナの協力については日本のみならず EU もすごく関心を持っていると思います。そういうことであるいは将来、ウクライナからのご要望に応じて日本と EU が一緒にウクライナに協力するということもあるかもしれません。そういうことで私は引き続き経済協力の面で、経済的安定の面で、ウクライナに協力を進めていくべきだと思います。どうもありがとうございました。

岡部 それでは市川先生、お願いします。

市川 まずはウクライナ側の三人の発言に関係することで、ちょっとお話ししようと思います。これまでに議論の中でキーワードが出てきているわけで、観光とか、人の交流とか、文化の交流に、そして人の育成ということもキーワードになってたかと思います。例えばセルゲイさんやアラ・コージナ先生もおっしゃったとおり、地域の市民レベルの交流というとき、観光産業なんかも大きく関わってくると思うんですけど、まだまだお互いの努力でいろんな交流ができる余地がたくさん残っていると思います。例えば西村議員がおっしゃったとおり、観光資源という意味でもウクライナはすごく魅力があって、それをもっともって日本からの旅行者が増えるようにアピールできるところがあると思うのですが、それだけではなく、例えば医療ビジネス、例えば、日本でウクライナから観光と日本が提供できる医療水準で健康とか、あるいはより快適な生活を送る上でのいろんなことを身に着けてもらう。例えば、ウクライナの隣のロシアなどでは、日本にはあまり来ないのですが、韓国とかシンガポールに医療ビジネスで行く人が大変多いと聞いております。

とくに日本からウクライナに行くときは、大変有り難いことに短い期間の滞在であればとくにビザを取ることもなく行くことができるわけで、割と行きや

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

すいのですが、日本からロシアに行く場合は、一日ビザを取ったりするのに大変な作業があるわけで、まだ日本からするとウクライナにはまだ行きやすいので、まだ交流の余地があると思います。

岡部 ありがとうございます。ウクライナ側、日本側両方から、さまざまな期待と助言が出たのではないかなと思います。いろいろ題が出まして、時間も無くなって参りましたので、どなたからでも結構ですので、今のお話を聞いてご発言されたい方は挙手願います。(西村代議士挙手)

西村 日本の外交、外務省の一つの考えとしてこういうのがあります。ウクライナも5千万人近い大きな国ですから一つの国として魅力があります。他方、周辺には旧ソ連圏で同じように民主化を目指している国があります。アゼルバイジャン、グルジア・ジョージア、モルドバといった国々です。外務省の中の考えとして、この4つの国々をGUAMと呼んで、ジョージア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドバを地域のグループとして応援をしようという考え方があります。つまり観光するにしても、ウクライナだけでももちろん魅力があるんですけど、その周辺の国々それぞれ魅力ある世界遺産もありますので、そういう形でマーケットとしても大きくなります。もちろんウクライナは最も大きい国ですから、他の小さな国と一緒にするなという気持ちもあるんだと思います。でも同じように民主化を目指し、発展をしようとする国々が地域で協力し合うことも大事だと思ってます。観光・旅行の企画をするときも、ウクライナはもちろん大きいので何日かいて、それからモルドバはまだ混乱しているかもしれませんが、ジョージア、アゼルバイジャンという観光のプランを作るのも一案かと思いますけれども、こういう考え方はどう思いますか？

岡部 実はアラ博士のご専門がツーリズムですのでぜひご意見を伺いたく思います。

コージナ とても素敵なアイデアだと思います。とくに我々ウクライナにとってグルジアとの協力関係が促進されることが大事だと思います。なぜなら最近グルジアでは民主化過程がとて進んでいるからです。モルドバも地理的にもっとも近い国であるので、これから関係を促進したいと思います。そういった意味で、さきほどおっしゃった GUAM はとても将来性があると思います。また、この GUAM という圏内の観光を進めていくことも、とても将来があると思います。

岡部 どうもありがとうございました。コージン提督から手が挙がっております。少し時間が押しておりますので短めをお願いいたします。

コージン このフォーラムの参加者すべてにとって最も大事なことは次のことです。第一に本日フォーラムで取り上げられた問題をまとめて、国家レベルで取り上げる必要があるのではないかと思います。その二は、先ほど申し上げましたとおり、日本ウクライナの友好団体、名付けて「キエフ・神戸」を築く必要があると思います。その当事者としては、本日お迎えいただいた神戸学院大学、ロータリークラブ（前日にコージン氏が講演）、そして本日ご参加の皆様です。そのために、非政府組織の協力が必要じゃないかと思います。以上です。

岡部 ありがとうございました。まだまだいろいろ聞いて見たいと思うのですが、ぜひ政府に取り上げてもらう必要があるとのことでしたが、楠本大使にぜひお願いをしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

時間がだいぶ迫って参りましたのでフロアからの質問をここで受け付けたいと思います。申し訳ございませんが7分ほどしか時間がございませんが、どなたからでも結構ですのでご発言されたい方がおられましたらお願いいたします。

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

一般参加者 今日ビジターとして来まして、友人がキエフに住んでまして、ドネツクの出身で、私自身いままで6回訪れまして、キエフに行ったことがあります。ドネツクではドンバスパレス（编者注：ドネツクの最高級ホテル）にも泊まったことがあります。

友人とビジネスとかいろんな交流をしたいと思っております、さきほどコージンさんが言われた「キエフ・神戸」といったオーガニゼーションでは、ビジネスの窓口もあるのでしょうか？

コージン もちろんです。100%間違いありません。

ヴォフク（在日ウクライナ人ビジネスマン） 日本とウクライナのビジネスと草の根交流を深めるためには、皆さん忘れがちですがただ一つの事が必要です。それは直行便です。週1回ぐらいでもあれば、まあ、西村議員さんが一声かけてもらえれば、たくさんの方がやはり観光客も含めて行ったり来たりすることが出来ます。

コージン これはぜひ国会議員の西村さんをお願いしたいことです。

西村 ぜひ私も希望しますので頑張りたいと思います。クロアチアもそうだったんですが、まずチャーター便で観光客、ビジネス客を何回か往復させることをやりましょう。その後、それが定期便になっていきます。キエフ・神戸センターを設立して、みんなで行きましょう。

岡部 ありがとうございます。それでは最後の質問になるかと思いますが、若い女性の方が手を挙げておられますので、ぜひお願いをいたします。

一般参加者 私はウクライナの事についてはあまり知らなかったんですけど

も、今回のフォーラムでいろんな方のお話が聞けてとても勉強になりました。文化面についてゲラシコフ・セルゲイさんに質問があるんですけども、さきほど日本のイメージが侍・武道と言っておられました。現代の日本人にあまり当てはまらない気がします。実際日本に来て日本人と接してどのような印象を受けましたか？

ゲラシコフ ご質問ありがとうございます。私は日本文化を研究して間もなく10年になります。さきほど日本は侍や芸者の国と申し上げましたが、それは向こうでの勝手なイメージで、自分はそういうふうにはぜんぜん思っていません。でもそれを私が知っているのは日本文化に関する研究をしているからです。残念ながら日本文化とあまり接していないウクライナ人はそういった勝手なイメージを作りがちです。そういった意味でもお互いに2国間の関係を促進しないといけないと思います。お互いに対して正確なイメージを作るために個人レベルの交流も大事だと思います。

岡部 ありがとうございます。活発なご議論をいただいて、やっと盛り上がってきたところで時間となりました。僭越ではございますが、共同主催者を代表いたしまして、わたくしから簡単に閉会の辞を述べさせていただきます。

東日本大震災以降、チェルノブイリ・福島ということで、ウクライナから科学者や政府関係者の来日が増えました。ただ、特定の分野ではなく、ウクライナと日本のお互いの国自体を多面的に知ろうという試みは、ここ関西だけではなく、日本でも非常に少ないのが現状です。今回のようにウクライナ・日本から各界を代表する有識者が一同に会しての学際的なフォーラムは、おそらく日本では初めての試みではないかと思います。

その意味で、今日ここに、パネリストならびにご参加の皆様がお集まりいただきましたことは非常に意義深く、歴史的な第一歩だと思います。今後、このような会合が増え、日本とウクライナの友好が深まっていくことを心より願っ

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

ております。

また特に動員をかけたわけでもありませんのに、多くの学生の皆様もお越しいただきました。改めまして感謝申し上げます。若くして国際会議にご参加されました経験が今後の学生生活に生きることを願います。これを機会に卒業旅行などでウクライナご訪問をご検討いただければとも思います。

もし可能であれば、2年後にこの日本ウクライナ地域経済文化フォーラムをまた日本で開催したく思っております。その際は皆様にぜひまたご参加いただき、そしてご助力も賜れば幸いです。

それでは簡単ではございますが閉会の辞とさせていただきます。どうもありがとうございました。

皆様、次は日本かウクライナでまたお会いいたしましょう。



写真前列左より楠本大使、西村代議士、コージン元議員、コージナ准教授
後列左より岡部准教授、ワリエワ氏、市川教授、ゲラシコフ博士

(Специальное издание)

Открытая дискуссия

Третий японо-украинский форум по культуре и региональной экономике

Дата: 2 июня 2012 г (суббота) начало в 13:00

Организатор: оргкомитет японо-украинского форума по культуре и региональной экономике
университет Кобе Гакуин, исследовательская лаборатория доцента Окабе Йошихико, университет Квансей Гакуин, исследовательская лаборатория профессора Итикава Фумихико

Содействие: факультет экономики университета Кобе Гакуин

Место проведения: университет Кобе Гакуин, Арисе, зал заседаний

Программа :

1 сессия: Экономика и культура (13:10-14:10)

докладчики: Итикава Фумихико (профессор факультета экономики университета Квансей Гакуин)

Кожина Алла (доцент Академии муниципального управления г. Киев, Украина, кандидат наук по специальности «Государственное управление»)

Гераськов Сергей (Государственный университет информатики и искусственного интеллекта, г.Донецк, Украина, кандидат философских наук)

ведущий: Окабе Йошихико (доцент факультета экономики университета Кобе Гакуин),

переводчик: Валиева Эльвира

перерыв (20 мин)

2 сессия: Политика и дипломатия (14:30-15:30)

приветственное выступление: Окада Тоеки (ректор университета Кобе Гакуин)

докладчики: Кусумото Юичи (Чрезвычайный и полномочный представитель министерства иностранных дел Японии в регионе Кансай, экс-

посол Японии в Узбекистане, экс-посол Японии в Польше)

Нисимура Ясутоши, (депутат палаты народных представителей Парламента Японии, бывший помощник министра иностранных дел)

Кожин Борис (народный депутат Верховной Рады Украины 2 и 3 созыва, первый главнокомандующий военно-морских сил Украины, вице-адмирал)

ведущий: Окабе Йошихико (доцент факультета экономики университета Кобе Гакуин),

переводчик: Валиева Эльвира

перерыв (10 мин)

пленарное заседание (15-40-16-20)

комментарии и ответы на вопросы: (16:20-16:40)

церемония закрытия форума

Общая информация об истории проведения японо-украинских форумов по культуре и региональной экономике

История японо-украинского форума по культуре и региональной экономике началась 3 года назад, с проведения 1го форума, организаторами которого выступили Государственный университет информатики и искусственного интеллекта г. Донецк, Украина и университеты Кобе Гакуин (лаборатория доцента Окабе Йошихико) и Квансей Гакуин (лаборатория профессора Итикава Фумихико), Япония. Форум имел уникальную концепцию – содействовать укреплению связей между Японией и Украиной не только на межгосударственном уровне, но и на региональном, а именно: между регионами Кансай (юго-западная Япония) и Донецкой областью (Украина).

В феврале 2009 г, во время посещения доцентом Окабе Донецкого Государственного университета информатики и искусственного интеллекта с целью проведения лекции на тему: «Японская экономика: история развития и дальнейшие перспективы», от ректора данного университета А.Шевченко и доцента И. Козловского к нему поступило предложение об организации японо-украинского форума. Таким образом, в марте 2010 г в Донецке был проведен 1ый японо-украинский форум по культуре и региональной экономике, за 2 дня проведения которого в нем приняли участие более 500 человек. От японской стороны в форуме приняли участие профессор университета Квансей Гакуин Итикава Фумихико, доцент университета Кобе Гакуин Окабе Йошихико и исполнительница японских традиционных танцев Тоусю Сейсе.

В августе 2010 г в Парламенте Украины (Верховная Рада) был проведен международный симпозиум «Экономический кризис и конкурентоспособность национальной экономики», организатором которого выступил парламентский комитет по муниципальному управлению и государственному строительству

Украины, при активном участии Кожина Бориса (народный депутат Верховной Рады Украины 2го и 3го созывов) и доцента Академии муниципального управления г. Киева Кожинной Аллы. В симпозиуме принимали участие и сотрудники посольства Японии в Украине. Также, с докладом на тему: «Экономика Японии: исторический ракурс и перспективы развития» выступил доцент Окабе, где, пользуясь случаем, последний обратился с просьбой об оказании содействия в проведении очередного японо-украинского форума.

В марте 2011 г, вскоре после трагедии в восточной Японии, доцент Окабе посетил Киев и выступил перед депутатами О. Омельченко (бывшего тогда мэром г. Киев) и Синченко, с разъяснением текущей ситуации в Японии. Также после этого был проведен 2ой японо-украинский форум по культуре и региональной экономике, где приняли участие профессор Итикава, президент федерации Кекусин Карате «Нихон Сеибукан» Кавано Ясуно, а также доцент Окабе. Во время своего посещения Украины им также довелось побеседовать с губернатором Донецкой области А. Близнюком (ныне министр строительства и регионального развития Украины), на темы укрепления экономического сотрудничества между 2 регионами.

В августе 2011, доцент Окабе посетил Украину, которая отмечала 20 годовщину приобретения национальной независимости, и в ходе данного визита Окабе встречается с депутатом Верховной Рады Украины, И. Зайцем (бывший министр экологии, ныне заместитель председателя комитета по экологической политике, природным ресурсам и реагированию на последствия катастрофы в Чернобыле).

В феврале 2012 г., в целях подготовки к проведению 3го японо-украинского форума по культуре и региональной экономике, Окабе посещает с визитом гг. Киев и Донецк. В Донецке Окабе встречается с ректором Шевченко и доцентом Козловским, к. ф. н. Герасковым С., и проводит совещание по подготовке к форуму. В Киеве Окабе встречается с сотрудниками посольства Японии в

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

Украине, где обменивается полезной информацией, посещает с официальным визитом министерство внутренних дел и комитет по охране государственных границ Украины, а также встречается с Патриархом Всеукраинским Филаретом, верховным деятелем Украинской Православной церкви. Также, во время этого посещения, Окабе встретился с супругами Кожиными для проведения заключительного обсуждения процесса подготовки к форуму.

И в июне 2012 г., в Японии торжественно открывается 3ий японо-украинский форум по культуре и региональной экономике, организованный благодаря содействию факультета экономики университета Кобе Гакуин и активной работе оргкомитета по подготовке и проведению 3го форума по культуре и региональной экономике.

В этот раз форум расширил свою тематику и к традиционным уже вопросам культуры и региональной экономики были добавлены также политика и дипломатические отношения. Мы надеемся, что благодаря такой обширной тематике дискуссий, форум и впредь будет содействовать углублению взаимопонимания между Японией и Украиной.

Открытая дискуссия

Сессия №.1

Тема: экономика и культура

Окабе: Позвольте от имени оргкомитета начать церемонию открытия 3го японо-украинского форума по культуре и региональной экономике.

Уважаемый Кожин Борис, депутат Верховной Рады Украины 2го и 3го созывов, члены украинской делегации, Ваше Превосходительство, Чрезвычайный и Полномочный Посол Министерства иностранных дел Японии в регионе Кансай г-н Кусумото, а также все присутствующие в зале! Благодарю за то,

что вы пришли сегодня на наш форум. Также, позвольте выразить благодарность и 5 гражданам Украины, проживающим в Японии, которые посетили сегодня наше мероприятие.

Пять лет назад, когда я первый раз ступил на украинскую землю, я и представить себе не мог, что когда-нибудь мне доведется открывать японо-украинский форум здесь, в Японии. Однако, памятуя о том, что Украина является одной из немногих стран мира, которые симпатизируют Японии, все эти годы я думал что же можно сделать, чтобы достойно ответить на такое благосклонное расположение к Японии.

И вот, наконец, благодаря содействию профессора университета Квансей Гакуин Итикава Фумихико, факультета экономики университета Кобе Гакуин, а также участию сегодняшних докладчиков, мы являемся свидетелями исторического момента открытия 3го японо-украинского форума по культуре и региональной экономике здесь, в Японии.

После трагической катастрофы 3.11 в восточной части Японии, учитывая то, что наши страны теперь связывает общий опыт ядерной катастрофы, отношения между Японией и Украиной значительно активизировались. Однако, надо все же признать, что в Японии мало еще знают об Украине. А ведь, на самом деле, наши две страны связывает много общего- и в культуре, и в плане геополитики. Поэтому, мне бы хотелось, чтобы благодаря этому форуму, как можно больше японцев узнало об Украине, и тогда можно с уверенностью считать миссию нашего форума выполненной.

Этот форум имеет уникальную особенность в том, что принять участие в нем сегодня собрались эксперты довольно широкого диапазона — начиная от экономики, политики, культуры и заканчивая дипломатией. Кроме того, ожидается, что сегодня на форуме пройдет взаимобмен информацией не только на межгосударственном уровне, но и на уровне региональном, а именно: между

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

регионами Кансай (юго-западная Япония) и регионами Украины. И мне думается, что такое двухуровневое общение- на межгосударственном и межрегиональном уровнях, имеет очень большое значение для дальнейшего укрепления двусторонних связей. Мы надеемся, что данный форум способствует углублению дружбы и сотрудничества между нашими странами. Благодарю за внимание.

Окабе: Продолжаем заседание. Позвольте далее представить сегодняшних панелистов, прошу обратить внимание на программу нашего форума, которая вместе с остальными раздаточными материалами лежит перед каждым из присутствующих в зале.

Прежде всего, с украинской стороны, позвольте представить вице-адмирала, Первого командующего ВМС Украины, депутата 2го и 3го созывов Верховной Рады Украины, г-на Кожина Бориса.

Далее, доцент Академии муниципального управления г. Киева г-жа Кожина Алла.

Ассистент кафедры Донецкого Государственного университета информатики и искусственного интеллекта, г-н Гераськов Сергей. Область его исследований- японская культура.

Теперь, позвольте перейти к представлению докладчиков с японской стороны:

Его Превосходительство Чрезвычайный и Полномочный Представитель МИД Японии в регионе Кансай, г-н Кусумото Юичи, в разные года бывший Послом Японии в Польше а также в Узбекистане.

Профессор факультета экономики университета Квансей Гакуин, г-н Итикава Фумихико.

Депутат Палаты народных представителей Парламента Японии, г-н Нисимура Ясутоши. Прибытие г-на депутата ожидается к 14-30.

Вести сегодняшний форум будет доцент факультета экономики университета Кобе Гакуин Окабе Йошихико, переводчик - Валиева Эльвира, аспирант университета Кобе Гакуин, уроженка Кыргызстана.

Валиева: Валиева. Заранее приношу свои извинения за возможные погрешности перевода.

Окабе: Позвольте внести некоторые уточнения. Мы все знаем, насколько хороший уровень русского языка у г-на Кусумото, выходца отдела стран бывшего СССР МИДа Японии, однако, в связи с установленной процедурой проведения сегодняшнего заседания, просим украинскую сторону выступать на русском языке, а докладчиков с японской стороны- на японском. Кроме того, мы знаем, что на Украине имеется свой самобытный, украинский язык, однако опять-таки, в связи с установленной процедурой перевода, мы просим наших украинских докладчиков выступать сегодня на русском языке. Приносим свои извинения в связи с причиненными неудобствами.

Кроме того, у каждого из присутствующих в зале есть брошюра с краткими пояснениями о расположении, истории и государственном устройстве Украины, вы можете воспользоваться ими для общего сведения, а также во время выступления украинских докладчиков, или в случае если вы захотите задать вопросы нашим панелистам.

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

Итак, позвольте перейти к официальной части, к приветственной речи от японской и украинской сторон. С японской стороны с приветственным словом выступит Его Превосходительство, Чрезвычайный и Полномочный Представитель МИД в регионе Кансай, г-н Кусумото, прошу Вас.

Кусумото: Здравствуйте, уважаемые дамы и господа. Позвольте представиться, Кусумото, ответственный за регион Кансай, куда входит и префектура Хего. (здесь и далее перевод на русский язык осуществляет сам г-н Кусумото, параллельно выступая на обоих языках.)

Я всегда задумываюсь над тем, что можно сделать для дальнейшего развития связей между регионом Кансай и внешним миром. И сегодня я бы хотел, чтобы мы подумали над этим все вместе. Мне довелось три раза побывать на Украине. Украина действительно прекрасная страна, являющаяся одним из крупнейших государств Европы. Она имеет мощную промышленную базу, но в то же время Украина является страной с древней историей и давними традициями. Поэтому мне бы хотелось, чтобы это послужило фундаментом для укрепления отношений Японии и Украины. Позвольте мне, от имени МИД и всего Правительства Японии, от всей души поздравить всех вас с открытием данного форума. Искренне желаю, чтобы благодаря данному форуму, взаимопонимание между Японией и Украиной и наши двусторонние отношения углубились. Благодарю за внимание.

Окабе: Благодарим г-на Кусумото за выступление. Далее прошу с приветственной речью от украинской делегации выступить адмирала Кожина.

Кожин: Уважаемые японские друзья!

Мы, представители Украины, приносим низкий поклон Его Величеству Императору Японии Акихито, и с огромным уважением кланяемся мощной силе

духа и величину японского народа. Для нас Япония - сильное морское государство с многовековыми историческими военно-морскими традициями.

Мы искренне благодарны доценту университета Кобе Гакуин Окабе Йошихико за приглашение приехать к вам. Нам очень приятно своими глазами увидеть многовековую культуру и историю Страны Восходящего Солнца — Японию, принять участие в международной научно-практической конференции.

На Украине живет народ доброй воли. Украина, как и Япония, отказалась от ядерного оружия во имя мира на Земле. Украинцы - миролюбивая, свободная и демократическая нация.

Между Украиной и Японией существует обоюдное уважение и интерес к истории, культуре, духовной самобытности и большой неиспользованный потенциал для более тесных взаимоотношений.

Я убежден, что и в дальнейшем, народная дипломатия, крепкая дружба и сотрудничество между японским и украинским народами будут усиливаться и укрепляться.

Мы уверены в том, что современные новейшие технологии, инновации, инвестиции, природные ресурсы и уважение к нашим народам, лягут в основу нашего сотрудничества и дружбы. Я мечтаю о том, чтобы наше сотрудничество о в политической, экономической, военной, информационной, сельскохозяйственной и др. сферах дали возможность почувствовать японскому и украинскому народам, что мы свободны, сильны и независимы.

Слава японскому народу! Слава Украине!

Окабе: Итак, мы начинаем 1ю сессию. Позвольте вкратце объяснить о порядке проведения дискуссии. Прежде всего, каждому докладчику отводится 5 мин на выступление. Поскольку это будет еще сопровождаться переводом, то 10 мин — на каждого из 3 докладчиков 1 сессии. Таким образом, оставшиеся 30 мин,

отведенные регламентом на 1 сессию, будут использованы для прений, по усмотрению ведущего. Тема сессии- культура и экономика.

Возможно, многие из сегодняшних гостей в зале удивятся, когда узнают, что сегодня в Киеве насчитывается 300-400 рестораников, где можно отведать суши. Кроме того, в обязательную программу начальной школы там включено изучение творчества Мацуо Басе, а в отдельных школах- включено и изучение японского языка. Не стоит и говорить о том, насколько популярны японские аниме среди украинской молодежи, но помимо этого, там существует и ассоциация Кендо! Почему же, несмотря на то, что мы, японцы, так мало знаем об Украине, в самой Украине «Япония» так популярна?

Чтобы ответить нам на этот вопрос, перед нами выступит ассистент кафедры Донецкого Государственного университета информатики и искусственного интеллекта, к.ф.н. Герасков Сергей. Прошу Вас!

Герасков: Уважаемые дамы и господа!

Скорее всего, Украина для большинства японцев сегодня является загадкой. Но, как пишет в своей книге экс-посол Японии в Украине г-н Юдзи Курокава, «Япония должна открыть для себя Украину». Сегодня я не буду говорить об экономике, а остановлюсь на культурных связях. Наши культуры имеют немало общего:

1. Еще в 1970-х гг. японским городом-побратимом столицы Украины, Киева стала древняя японская столица - Киото, а Одессы – портовый город Иокогама. Их именами назывались улицы, парки, корабли и т.д., осуществлялись культурные контакты (различные выставки, концерты и т.п.). Эти связи успешно продолжают и в наше время.

2. Японскую и украинскую культуры я определяю как «рыцарские», имея в виду большое значение самураев и казаков в истории наших стран. Это очень

важно, так как русскую и китайскую культуры, к примеру, «рыцарскими» назвать уже нельзя (казаки появились и сформировались в Украине, а не в России).

3. Наши нации «кордоцентричны»: многое воспринимается Сердцем, душой. Японское «кокоро» и украинское «серце» играют важную роль в принятии решений, часто определяют наше поведение и пронизывают жизнь наших обществ.

4. Музыкальность наших культур. Украинцы, как и японцы, очень любят петь, имеют давние музыкальные традиции, чтят народные песни, инструменты и танцы.

Это лишь некоторые примеры.

Сегодня можно говорить, что в Украине знают о Японии, с одной стороны, очень много, а с другой — очень мало. Проводятся многочисленные фестивали японской культуры (самые крупные — «Японская осень» в Киеве и «Японская весна» в Донецке). Каковы причины интереса украинцев к Японии? В интервью я часто отвечаю: «Япония хороша тем, что у каждого она своя». Япония в состоянии предоставить украинцам практически неограниченный набор составляющих своего образа на любой вкус. Если человеку не нравится политика, скучна экономика, если его не интересуют живопись или литература, он все равно найдет для себя нечто такое, что «западет» ему в душу, будь то икэбана или каратэ. С другой стороны, историческая и географическая отдаленность, довольно запутанная система отношений «Восток-Запад», а также фантазия украинцев привели к тому, что Япония для Украины — во многом «картинка». Часто эта «картинка» имеет мало общего с оригиналом и сводится к группе устойчивых стереотипов. Их можно назвать «мифами о Японии»:

1. Япония — электронная империя, «страна Sony и Toyota».
2. Япония — страна, «где все, от мала до велика, смотрят аниме и читают мнга».

3. Япония – страна, «где все умные».
4. Япония – страна гейш и самураев.
5. Япония – страна, «где все пьют чай и выращивают цветы».

Эти мифы во многом и формируют восприятие Японии в Украине. В результате, уже несколько десятилетий Япония выглядит для Украины вполне гармонично, представляя собой идеальное для многих украинцев сочетание высокого материального уровня жизни и развитых духовных потребностей. Думаю, что у японцев также существуют свои «мифы» о Восточной Европе. Самым главным здесь является понимание того, что Украина – это не Россия, а самобытное государство с древней историей и богатой культурой.

Проблемы и перспективы японско-украинских отношений в сфере культуры хорошо видны на примере будо. С ними связан еще один чрезвычайно популярный в Украине миф о Японии – то, что «все японцы поголовно практикуют боевые искусства». Как известно, в XX в. будо распространились по всему миру, и Украина не стала исключением. В целом, боевыми искусствами в Украине занимаются около 1,5 млн. человек. Это – один из самых высоких показателей в мире. Причем, будо в этом списке находятся на ведущих ролях. В опросе, проведенном Донецким порталом боевых искусств, спрашивалось: «Каким видом боевых искусств (единоборств) Вы занимаетесь?». На первом месте (26,7% респондентов) с большим отрывом оказалось каратэ-до, а дзюдо, дзю-дзюцу и айкидо вошли в первую десятку.

Популярность будо в Украине удивляет японских мастеров, однако ее можно объяснить. Президент Академии будо ?Ниппон сэйбукай? Кавано Ясуо говорит, что в Японии сейчас созданы все условия для занятий будо: большое количество додзё, огромный выбор инструкторов, школ и т.д. Можно сказать, что японцы пресыщены будо, и часто не имеют достаточной мотивации заниматься боевыми искусствами. На Западе (а Украина для Японии – все равно, что Страна заходя-

щего солнца), напротив, мотивация «догнать и перегнать» родоначальников будо очень высока.

Вместе с тем необходимо выделить и ряд проблемных моментов, связанных с распространением будо в Украине.

1. Коммерческий фактор. Не секрет, что будо во многих странах — своего рода бизнес. Украину не обошла стороной эта проблема. Большое количество мастеров смотрят на будо как на верный источник получения прибыли. При этом, чем экзотичнее вид боевого искусства, тем больший доход оно сулит. Например, ниндзюцу. В Украине мало кто знает, что это такое и существует ли это вообще, а потому молодые люди с удовольствием шьют черные одежды, точат сюрикэны, пытаются ходить по потолку, воображая себя синоби, и платят за это немалые деньги.

2. Организационный фактор. Методы руководства во многих федерациях будо в Украине однозначно можно назвать тоталитарными. Руководство федераций часто ведет жесткую административную политику по отношению к своим членам, и это становится похожим на жизнь внутри клана, но не в смысле удзи, а в смысле синко сюкё (рус. секта). Некоторые люди называют внутренний порядок в Ассоциации Айкидо Айкикай Украины (АААУ) «солдафонщиной». И это при том, что айкидо считается реализацией гармоничных отношений между людьми!

3. Культурный фактор. Украинские мастера будо, как правило, пренебрегают философскими, психологическими и этическими аспектами будо. Это объясняется слабыми познаниями в области японской культуры: незнанием японского языка, традиций, этикета и т.д. Корень этих проблем — в географической отдаленности Японии от Украины. В итоге, образ Японии нередко формируется через третьи страны (прежде всего, англоязычные).

Итак, потенциал развития как будо, так и японской культуры в целом в

Украине, безусловно, велик. Но существует и ряд достаточно серьезных проблем. Сложившуюся ситуацию хорошо передает рассказ «Бататовая каша» Акутагава Рюноске — история о самурае, у которого было сильное желание испробовать бататовой каши. Однажды он получил то, что хотел, и получил много, после чего желание, которым он долгое время жил, пропало. Кажется, что украинское общество сегодня наполнено Японией до отказа, но если оно требует еще, значит, пока недостаточно. Думается, что украинская культура сможет «переварить» эту проблему, и со временем количество знаний о Японии перейдет в их качество. Спасибо за внимание!

Окабе: благодарим г-на Гераськова за интересное выступление, благодаря которому мы узнали много нового. Далее нашу сессию продолжают профессор Итикава и доцент Кожина, которые поведают нам о Японии и Украине уже в экономическом ракурсе, а именно — об экономике обеих стран, двусторонних экономических отношениях и о своих впечатлениях. Итак, прошу профессора Итикава подготовиться к выступлению.

Итикава: Позвольте представиться, Итикава. Прежде всего, хочу отметить, что данный форум состоялся благодаря неустанным усилиям главы оргкомитета по подготовке и проведению форума, доцента Окабе, а также поддержке университета Кобе Гакуин.

Этот форум впервые проводится в Японии, предыдущие два японо-украинских форума проводились на Украине. И я очень рад тому, что нам удалось пригласить г-на Гераськова С., который немало сделал для организации предыдущих форумов, а также супругов Кожиных сюда, в Кобе.

Помимо этого, позвольте выразить глубокую признательность депутату Нисимура, имеющего опыт работы помощником министра иностранных дел, а

также Чрезвычайному и Полномочному Представителю МИД в регионе Кансай г-ну Кусумото, которые, несмотря на свою огромную занятость, смогли найти время присутствовать на сегодняшнем форуме, и мы все с интересом хотели бы послушать их видение сегодняшней тематики в ракурсе международной политики и дипломатии.

Итак, Украина- это страна, которая находится к западу от соседней России, население Украины составляет 45 млн чел., и по этому показателю это второе по величине государство в Восточной Европе. Даже после финансового кризиса 2008 г Украина продолжала удерживать 4% темп экономического роста, и ожидается, что емкость потребительского рынка Украины, вкупе с уровнем ее национального дохода, будет расти и впредь. То есть, это означает, что Украина имеет огромный бизнес-потенциал для продвижения японских предприятий на ее внутренний рынок.

Развитию экономического сотрудничества между Украиной и Японией во многом способствовало основание представительства JETRO (организация содействия внешней торговле Японии) в Киеве, которое связывает японские инвестиции и внешнеторговые сделки с украинскими партнерами. По этому поводу мне запомнилось, как в марте прошлого года мэр г. Донецк А.Близнюк (ныне министр по региональному развитию), в своем выступлении на 2ом японо-украинском форуме, проводимом в Донецке, озвучил далекоидущие планы на этот счет. Кроме того, благодаря работе JICA (японское агентство по международному сотрудничеству), в целях дальнейшего продвижения двусторонних внешнеторговых отношений, в Японский Центр в Украине были направлены специалисты JICA. Вдобавок, в Японию из Украины также прибыло более 250 чел. в качестве стажеров для перенятия японского опыта. (по состоянию на 2011 г)

Такое активное развитие экономических взаимоотношений в последние годы

глубоко радуется. Но одновременно, Украина все еще остается неизвестной для региона Кинки (юго-западная Япония).

Хотелось бы надеяться, что впредь, предприятия Киева, Донецкой области (Украина), и региона Кинки (Япония) откроют для себя возможности для взаимовыгодного экономического сотрудничества. То, что я собираюсь сказать далее, на самом деле созвучно с тем, что говорил доцент Окабе в прошлом году на японо-украинском форуме в Украине, а именно- известно, что в июне с.г. совместно с Польшей, Украина проводит чемпионат Европы по футболу. Ожидается, что с такими значимыми событиями, как Евро-Кубок, или Всемирная Выставка, на Украине активизируется туризм, причем в новом качестве. Мне думается, что и японские предприятия особенно из региона Кинки, выходцем которого является знаменитый писатель манга Тедзука, смогли бы найти свою нишу в экспорте на Украину. К примеру, предоставлять Украине продукцию содержания т.н. «Cool Japan» (Япония, вызывающая восхищение)- как аниме, манга, и тд. Тема этой сессии- экономика и культура и я считаю, что продвигать эти две сферы одновременно возможно лишь благодаря подготовке и наличию инициативных кадров. Мне довелось принять участие в японо-украинском форуме в 2010-2011 гг, которые были проведены в Донецком Государственном университете информатики и искусственного интеллекта. (ДГУИИИ) Что мне больше всего запомнилось, так это огромное количество студентов, интересующихся японской культурой, обществом и японским языком, которые занимаются в центре «Аматерасу» при ДГУИИИ, представителем которого является г-н Герасков. Более того, мне также запомнилась и одна студентка, которая, несмотря на дальнее расстояние, сев на ночной поезд, специально приехала в Донецк из Киева только для участия в форуме.

На следующей неделе мы ожидаем доцента Кожину и г-на Гераскова к нам, в Квансей Гакуин с лекцией. Доцент Кожина выступит там с лекцией на

интересную тему: «Украина: потенциал экономического развития и ее бренды».

Таким образом, я уверен, что благодаря данному форуму, отношения между нашими странами будут углубляться и далее, посредством посылы стимулов молодежи обеих стран. Благодарю за внимание.

Окабе: Спасибо за выступление, профессор Итикава. А теперь, прошу подготовиться к выступлению доцента Кожину. Пожалуйста, расскажите нам о своем видении этой темы с точки зрения экономиста.

Кожина: Добрый день, уважаемые участники японско-украинского форума по культуре и региональной экономике. Для меня - большая честь сегодня находиться в Японии и выступать перед вами. Особенно я хочу поблагодарить организатора нашего мероприятия, доцента Йошихико Окабе, который приложил много сил для укрепления японско-украинского сотрудничества и обмена опытом.

Цель моего короткого выступления – рассказать вам об экономике Украины, ее современном состоянии, проблемах, возможностях, а также о перспективах японско-украинского сотрудничества в экономической сфере.

Я хочу начать с того, что в Японии мало знают об Украине как стране, и тем более, об особенностях ее экономики. Экономическое развитие Японии сегодня достигло колоссальных успехов. До недавнего времени Япония занимала 3-е место в мире по экономическому развитию. Поэтому представителей такой страны сложно удивить экономикой Украины, которая занимает только 39-е место в мире по уровню ВВП (валового внутреннего продукта).

Вместе с тем, у Украины также имеется достаточно серьезный экономический потенциал и выгодное географическое расположение. Украина является членом ВТО (Всемирной торговой организации).

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

Украина – промышленно-аграрная страна. До 2005 г экономическая модель Украины была преимущественно экспортоориентированной, которой присуща зависимость от внешнего спроса. Доля экспорта в структуре ВВП составила более 50%.

На сегодня Украина является одним из ведущих экспортеров некоторых видов сельскохозяйственной продукции и продовольствия, и играет важную роль в обеспечении глобальной продовольственной безопасности. Она занимает первое место в мире по экспорту семян подсолнечника и подсолнечного масла, и второе – по их производству. Украина вошла в тройку крупнейших экспортеров зерна, по ячменю – занимает первое место.

Украина обладает значительным интеллектуальным и технологическим потенциалом в промышленности. Экономический комплекс страны включает такие виды промышленности, как тяжелое машиностроение, черная и цветная металлургия, судостроение, автомобилестроение, авиастроение, производство техники, оборудования для электростанций, нефтегазовой и химической промышленности.

В мире известны такие торгово-промышленные бренды Украины, как самолеты “Антонов”, двигатели “Мотор-Сич”, гидроэнергетическое оборудование “Турбоатом”, «КВАЗАР».

Украина является мощным производителем электроэнергии.

Налажено производство ракетносителей, спутников и оборудования для исследования космоса. Также Украина является крупным производителем оружия – танков, военно-транспортных самолетов, зенитно-ракетных комплексов, оптического оборудования.

Вместе с тем, при значительном экономическом потенциале, в экономике Украины существует ряд проблем. Промышленность Украины носит экспорто-адаптивный характер, характеризующийся преобладанием слабодиверсифициро-

ванного низкотехнологического производства и побуждает страну приспособляться к потребностям мирового рынка в пределах имеющихся внутренних возможностей и текущих конкурентных преимуществ. Поэтому существует необходимость формирования внутреннего рынка.

На Украине преобладает ресурсоемкая и энергозатратная экономика на фоне злоупотреблений властью. При наличии идей и ресурсов для значительного экономического развития не хватает технологий и качественного управленческого обеспечения.

Что касается сотрудничества и его перспектив между Украиной и Японией, необходимо отметить, что экономические отношения являются неразвитыми. Однако, с каждым годом крепнет экономическое и гуманитарное сотрудничество, разработаны конкретные проекты.

Между Украиной и Японией существует обоюдное уважение и интерес к истории, культуре, духовной самобытности и большой неиспользованный потенциал для более тесных взаимоотношений, несмотря на географическую отдаленность.

Стоит напомнить, что наши страны объединяют ядерные трагедии. В этом году подписан Межгосударственный договор о сотрудничестве в борьбе с последствиями ядерных катастроф — Фукусимы и Чернобыля.

Украина благодарна Японии за поддержку в виде кредитов и грантов, предоставленных по линии «официальной помощи развитию», которые направлены на поддержку здравоохранения, культурной сферы, масштабных инфраструктурных проектов. Вклад Японии только в решение проблем, связанных с последствиями катастрофы на Чернобыльской АЭС, составляет более 100 млн. долларов.

Между Украиной и Японией перспективным направлением сотрудничества являются сферы энергосбережения, экологии, энергетики. В настоящее время мы уже ведем сотрудничество по «Схеме зеленых инвестиций». В рамках

Киотского протокола Украина продает Японии свои квоты на выбросы парниковых газов. Полученные Украиной деньги от этой продажи используются на проекты по улучшению экологической ситуации и эффективного использования энергии.

В продуктовой сфере Японию интересует украинская кукуруза и молочные продукты, Украину – японские морепродукты и рыба.

Украина для Японии является привлекательной с экономической точки зрения в таких сферах, как инфраструктура, инвестиции, сельское хозяйство, а также геополитическое расположение. Приоритетным остается сотрудничество в образовательной, научной и инновационной сферах.

Мы надеемся, что интерес инвесторов к Украине будет расти, особенно учитывая географическую близость государства к рынкам ЕС и СНГ, и благоприятные факторы производства.

Окабе: Благодарим доцента Кожину. Вообще то, дискуссионная форма проведения японо-украинского форума используется в этот раз впервые, поэтому ввиду отсутствия опыта, определение регламента прений является довольно трудным делом, кроме того, до конца 1 сессии осталось всего лишь 5 мин. Тем не менее, по окончании обеих сессий предусмотрено время для общих дискуссий, поэтому прошу задавать вопросы в это время. А сейчас, очень коротко, прошу ответить на вопросы наших трех докладчиков.

Думаю, что очень трудно объединить в одно такие разные сферы, как культура и экономика, однако, если все же попытаться сделать это, то пожалуй, общее, что их объединяет- это большая значимость общения между людьми. Поэтому следующий вопрос мне хотелось бы задать профессору Итикава и доценту Кожиной, скажите нам, вкратце, общение в какой области Вы считаете наиболее важным? А г-ну Гераськову мне тоже хотелось бы задать следующий вопрос-

сегодня в зале собралось более 50 японцев, Вы говорили, что в Японии мало знают об Украине, а что бы Вы хотели, чтобы японцы узнали о ней прежде всего?

Итикава: На Ваш вопрос скажу, что ответ на него уже прозвучал в докладе доцента Кожиной, а именно: это несомненно, сотрудничество в тех областях, в которых Украина активно наращивает сейчас свой потенциал роста. Более конкретно, это- окружающая среда, энергетика, природные ресурсы, важность которых бесспорна. Ну, и вдобавок к этому, из нашей совместной с доцентом Окабе теории,- это развитие и открытие новых отраслей, которые бы способствовали развитию взаимодействия между нашими людьми, а для этого необходимо развивать туризм, и проводить крупные мероприятия, куда бы шел приток большого количества людей извне.

Кожина: Я полностью согласна с профессором Итикава. Как уже было сказано, это такие значимые сферы, как экология, внедрение новых технологий, и тд. Ну и кроме того, важен культурный обмен тоже.

Окабе: Спасибо за ответы. А теперь, прошу г-на Гераськова прорекламировать нам Украину.

Гераськов: Безусловно, есть много чего, что хотелось бы чтобы знали об Украине, однако, как говорится в пословице, «Лучше один раз увидеть, чем сто раз услышать», поэтому я пожелал бы всем присутствующим в зале своими глазами удостовериться в красотах Украины, приехав туда. А по поводу предыдущего вопроса, я согласен с обоими выступающими тоже. Я считаю, что в дальнейшем отношения между нами, будь то бизнес, или культурный обмен,

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

- будут только развиваться. Пожалуйста, уважаемые гости, если представится возможность, обязательно посетите Украину.

Окабе: Огромное спасибо. Уважаемые гости, у каждого из присутствующих в зале в пакете с материалами есть по 1 шоколадной конфете, в качестве подарка от наших украинских панелистов. Пожалуйста, попробуйте вкус украинских конфет, тем более, что как раз наступило время перерыва.

Позвольте перед этим сделать небольшое объявление. Благодаря стараниям консультанта секции Айкидо нашего университета г-на Ямадзакки Акихико, а также предыдущего консультанта упомянутой секции, почетного профессора факультета диетологии и питания нашего университета г-на Кусано, завтра планируются тренировки секции Айкидо, приуроченные к проведению данного форума и приезду г-на Гераськова, только что поведавшего нам о своей любви к Айкидо. Начало тренировок назначено на 10:00, в спортзале нашего университета. Двери будут открыты для всех, поэтому те, у кого возник интерес, добро пожаловать! Также, добавлю, что секция Айкидо нашего университета продолжает набор новых членов. За дополнительной информацией обращайтесь в вышеозначенную секцию.

Итак, объявляется небольшой перерыв, и как раз мы видим, что депутат Нисимура уже прибыл.

Открытая дискуссия

Сессия №2

Тема: **Политика и дипломатия**

Окабе: Итак, подошло время для начала 2 сессии, и мы продолжаем наш

форум. Несколько минут ранее прибыл ректор нашего университета г-н Окада Тоеки. Попросим ректора выступить перед гостями форума с приветственным словом от имени университета.

Окада : Здравствуйте, уважаемые господа. Позвольте представиться, Окада, ректор данного университета. Поздравляю всех с организацией 3го японо-украинского форума по культуре и региональной экономике, позвольте сказать несколько слов приветствия от имени университета Кобе Гакуин.

Прежде всего, позвольте приветствовать в стенах нашего университета депутата двух созывов Верховной Рады Украины, г-на Кожина и в его лице всю украинскую делегацию, а также Чрезвычайного и Полномочного Представителя правительства г-на Кусумото, депутата Парламента Японии г-на Нисимура, а также уважаемых гостей сегодняшнего форума. Добро пожаловать в наш университет, мы очень рады встречать вас в своих стенах!

Два года назад, я получил в подарок от доцента нашего университета Окабе, только что вернувшегося из своей поездки на Украину, водку, по виду довольно дорогую. Я до сих пор храню ее у себя в кабинете. Тогда же я узнал и то, что классик французской литературы, Оноре де Бальзак, закат своих лет встретил на Украине. Помню, как подумал тогда, что же это за страна такая, которая обладает столь притягательной силой, как вдруг я узнал, что в нашем университете планируется проведение 3го японо-украинского форума. Проведение такого форума в Японии – впервые в истории, поэтому это является огромной честью для нашего университета.

Я слышал, что у Украины и Японии очень много общего. Мне бы хотелось, чтобы благодаря этому форуму, взаимоотношения и взаимопонимание между нашими странами укрепились еще больше. Кроме того, я слышал, что одной из целей форума является взаимообмен между нами не только на межгосударстве-

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

ном, но и на межрегиональном уровнях, т.е. между регионом Кансай и Донецкой областью Украины. Девиз нашего университета – «Активный и энергичный университет, Кобе Гакуин!», и я желаю всем нам, чтобы благодаря проведению этого форума, мы получили бы еще больший заряд энергии и бодрости.

В этом году наш университет отмечает свою 100 летнюю годовщину учреждения. Вместе в нашими 7 факультетами, аспирантурой по 8 специальностям, и более 10 тыс студентов, придерживаясь концепции нашего университета «Любовь к истине и уважение индивидуальности», мы собираемся и впредь содействовать делу активизации образования и научных исследований, используя нашу качественную особенность разнопрофильного университета.

И мы также надеемся, что посредством проведения данного форума наш университет сможет дать некий новый посыл внешнему миру. Итак, еще раз хотелось бы поприветствовать всех участников и гостей нашего форума, желаю всем активных и бурных дискуссий. Еще раз поздравляю всех с проведением данного форума!

Окабе: Далее, г-н Кожин, являющийся жителем г.Киева, столицы Украины, хотел бы передать в дар ректору университета герб своего города. Прошу Вас.

Кожин: Позвольте вручить Вам герб моего города Киева, в подарок от всей Украины. От всей души желаю, чтобы отношения между нашими странами только укреплялись!

Окабе: У г-на Гераськова также есть небольшой подарок университету Кобе Гакуин, который отмечает свое 100 летие со дня основания, и этот подарок

немного похож на эмблему нашего университета.

Гераськов: Я слышал, что в этом году университет Кобе Гакуин отмечает свое 100 летие. Памятуя о том, что эмблемой Вашего университета является чайка, позвольте вручить Вам эту статуэтку, немного похожую на чайку. Надеюсь на дальнейшее углубление взаимоотношений между нами.

Окабе: Большое спасибо. Продолжаем наш форум. Позвольте объявить о начале 2 сессии, темой которой является политика и дипломатия. Конечно, политика и дипломатия- это слишком обширная тематика сама по себе, тем более, если объединить их в одну секцию.

Поскольку наш форум носит скорее дискуссионный характер, и не претендует на озвучивание каких-либо официальных заявлений, давайте постараемся обойтись сегодня без излишнего официоза, и опустим щекотливые моменты большой политики, если таковые имеются. Пусть же наша дискуссия сегодня будет иметь характер живой беседы, обмена мнениями. Единственное, о чем хотелось бы попросить выступающих- это придерживаться сегодняшней тематики, а именно: взаимоотношений Японии Украины.

Прежде всего, возможно многие из гостей в зале знают, что в 2004 г на Украине произошла т.н. Оранжевая революция, благодаря чему Украина стала привлекать к себе пристальное внимание со стороны внешнего мира. Однако, мало кто знает в Японии о дальнейшей ситуации на Украине, уже после Оранжевой революции. Во 2ой сессии первым выступит с докладом г-н Кожин, когда-то бывший депутатом Верховной Рады Украины двух созывов. В его выступлении мы услышим не только об истории украинского государства, но и о текущей политической обстановке в нем. Хотелось бы также услышать и о том, как г-н Кожин видит дальнейшее развитие наших двусторонних отношений.

Регламент выступления 5 мин.

Кожин: Добрый день, уважаемые участники и гости сегодняшнего форума!

Позвольте сразу перейти непосредственно к докладу. Украина есть суверенное, независимое, демократическое, социальное, правовое государство. Это одно из крупнейших государств Европы, занимает площадь 604 тыс. кв. км, имеет 46 млн. человек населения. Украину омывают Черное и Азовское моря. Основной религией Украины является христианство.

Первое поселение людей на нашей территории было обнаружено на Хортице, г. Запорожье, 35 тыс. лет до н.э., а первая письменность, слова которой выбиты на крупных камнях на территории Каменной Могилы Запорожской области, датируются 25 тыс. лет до н.э.

В X веке на территории Украины существовало сильное, мощное, влиятельное государство Киевская Русь. А в средние века на территории Украины три века существовала уникальная казацкая республика Запорожская Сечь. Выборным руководителем Казацкого государства был Гетман.

Украина это государство, давшее миру таких великих людей, как: князь Владимир Великий, гетман Богдан Хмельницкий, гения украинского народа Тараса Шевченко.

Но вместе с тем, Украина это страна- производитель мощных ракет для запуска космических станций, мощных самолетов «Руслан», «Мечта», «АН-72», современных кораблей.

Также, Украина – это государство знаменитых писанок – яиц, декорированных традиционными символами, которые нарисованы с помощью воска и красок; вышиванок – традиционных украинских сорочек; колядок – обрядовых песен зимнего цикла, восходящих к глубокой древности; футбольных клубов «Динамо», «Шахтер», боксеров – братьев Кличко и ЕВРО – 2012.

После распада Советского Союза Украина взяла курс на построение независимого, демократического государства и открытого гражданского общества. Наши взаимоотношения с РФ мы стремимся строить на равноправных взаимовыгодных условиях, но это не всегда получается.

Украина имеет собственные вооруженные силы, в том числе и военно-морские силы. Украина способна обеспечить свою безопасность самостоятельно. Мы подписали Меморандум и отдали ядерное оружие. Получили от США, РФ и Великобритании гарантии безопасности для Украины. Также мы имеем гарантии безопасности со стороны ООН.

Украина приняла демократическую Конституцию в 1996 году. В статье 17 написано: «На территории Украины не допускается расположение иностранных военных баз». Таким образом, присутствие Черноморского флота РФ на территории Украины есть нарушение Конституции Украины, требующее немедленного решения.

Состояние дел в Украине на текущий момент в системе государственности имеет много внутренних и внешних противоречий. На Украине сейчас происходит переориентация политических сил, объединение их в единую, мощную, демократическую силу. Решающим моментом демократического развития Украины будут выборы в Верховный Совет в октябре 2012 года и проходом в парламент большинства от национально-демократических сил. Ключевым событием на пути демократизации Украины будут также и президентские выборы 2015 года.

Опыт сотрудничества между Японией и Украиной свидетельствует о том, что народная дипломатия между нашими странами развивается и укрепляется. Таким примером может служить украинско-японская дружба и сотрудничество между городами-побратимами Киото и Киев, сотрудничество между учебными заведениями, общественными организациями, а также настоящий форум.

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

На Украине ведет свою активную деятельность центр японо-украинской дружбы. И сегодня, пользуясь предоставленной возможностью, я бы хотел предложить создать здесь, в Кобе, аналогичный центр японо-украинской дружбы, под названием «Киев-Кобе». (аплодисменты в зале)

Я убежден, что и в дальнейшем благодаря нашему сотрудничеству в различных сферах когда-нибудь будут созданы такие технологии, которые смогли бы предотвратить ядерные трагедии, подобные тем, что пережили оба наших народа!

Спасибо за внимание!

Окабе: Большое спасибо, г-н Кожин. Продолжаем нашу сессию. Далее перед нами выступит депутат Нисимура Ясутоши. Если судить по данным интернет-сайтов, то г-н депутат имеет обширные связи с большим количеством иностранных государств.

Лично я убежден, что г-н Нисимура является одним из наиболее перспективных политиков, которые могли бы занять пост главы государства. И я говорю это не потому, что г-н Нисимура принимает сегодня участие в нашем форуме. (аплодисменты со стороны украинской делегации). Что касается Украины, то в бытность свою помощником министра иностранных дел г-н Нисимура встречался с Юлией Тимошенко, а также посещал Украину 2 года назад с официальным визитом. Прошу Вас, г-н депутат, рассказать нам сегодня и об этом опыте тоже.

Нисимура: Для меня большая честь быть представленным в таком свете.

Мой избирательный участок — г.Акаси и о.Авадзисима, которые соседствуют с западной частью Кобе, где как раз расположен университет Кобе Гакуин. Оттуда меня делегировали в Парламент. Студенты этого университета часто

используют станцию Акаси, и поэтому этот университет довольно близок для местных жителей. Я очень признателен доценту Окабе за приглашение поучаствовать в этом форуме, поскольку в бытность свою помощником министра иностранных дел, мне доводилось курировать и Украину в том числе. Возможно, это уже затрагивалось сегодня, — во время своей работы в МИДе я впервые узнал, что Украина- это родина того красного супа,- борща, а куриные котлеты, которые я с большим аппетитом отведал в Киеве- очень близки вкусу японцев. Добавлю, что во времена моего детства, то есть примерно лет 40 назад, любой японец, в ответ на вопрос о трех самых любимых вещах, перечислил бы-?Кедзин, Тайхо и яичница?. Кедзин- это команда профессиональной бейсбольной лиги, Тайхо, — это знаменитый борец Сумо того времени, он считался самым сильным тогда, и что интересно, его отец был украинец. Однако, я бы добавил, что в то время у японцев был еще один объект всеобщей любви- это Либераль- но-Демократическая Партия Японии (ЛДП), к которой я принадлежу.

Тема сегодняшней дискуссии — политика, поэтому я перейду уже к вопросам политическим. Наша партия ЛДП- это партия, которая более 50 лет удерживала власть, неизменно побеждая на демократических выборах. Скоро будет 9 лет, как я стал депутатом, но два года назад наша партия уступила руль власти и сейчас является партией оппозиции, хотя я лично убежден в том, что на следующих выборах наша партия вернет себе бразды правления. Так вот, 6-7 лет назад к нам для заимствования опыта часто приезжали россияне, чтобы изучить политическое устройство ЛДП, поскольку их очень интересовало как, в условиях свободных демократических выборов, одна партия смогла более 50 лет удерживать правление. Также мне доводилось встречаться и с украинскими коллегами- депутатами, которых тоже интересовал тот же самый вопрос.

Поскольку это не относится к теме нашего сегодняшнего форума, я опущу детали, но в марте 2009 г мне довелось встречать Юлию Тимошенко, бывшую

тогда премьер-министром, в аэропорту, и даже побеседовать за деловым завтраком. В сентябре 2010 г я посетил Киев с деловым визитом, а буквально месяц назад встречался со спикером Верховной Рады Украины г-ном Литвиным. Благодаря таким встречам и опыту общения с деятелями Украины, у меня сложилось свое впечатление об Украине, чем бы я и хотел поделиться с вами. Первое, это то, что Украина — это довольно спокойная и развитая страна. Здесь развита черная металлургия, но одновременно, это крупнейшая агро-промышленная держава, экспортирующая много сельскохозяйственной продукции. У нее очень богатая культура- мне посчастливилось посетить собор Святой Софии и Киево-Печорскую Лавру, я считаю что это прекрасные образцы мирового культурного наследия.

Но, помимо этого, у меня сложилось впечатление, что эта крупная держава испытывает значительные трудности. Я бы назвал Украину «государством, испытывающим трудности» или, иначе, «страной, находящейся на распутье». Подробнее об этом мы поговорим во время прений, а сейчас, если сказать вкратце, Украина имеет важное, с геополитической точки зрения расположение, находясь между Россией и Европой. Именно в этом, я полагаю, и заключаются ее нынешние трудности, поскольку Украина не может не испытывать влияния обоих этих центров мирового масштаба, и ей приходится лавировать между ними, чтобы поддерживать с ними одинаково ровные отношения.

И в этом, я считаю, мы также имеем сходство с Украиной- нам тоже приходится лавировать между США и КНР, чтобы удерживать стабильные отношения с обоими государствами. Или же, можно сказать, что Япония балансирует между США и Россией, поскольку это- два крупных наших соседа по карте. Поэтому нашим двум странам, Японии и Украине, исходя из нашего общего положения, надо подумать, каким образом осуществлять свою дальнейшую политику, умело балансируя между крупными мировыми силами,

и как удерживать со всеми равные отношения. Я называю это «государство-гибрид», или же «гибридная дипломатия». (по аналогии с гибридным автомобилем, который работает как на электричестве, так и на бензине) Вопрос состоит только в том, сумеем ли мы осуществить это. Мой доклад длится уже 5 мин 15 сек. поэтому позвольте на этом завершить свое выступление.

Окабе: Благодарим г-на Нисимура. Далее мы заслушаем выступление г-на Кусумото, Чрезвычайного и Полномочного Представителя МИД Японии. Мы прослушали уже два выступления, и теперь нам было бы интересно услышать о Вашем видении, как профессионального дипломата, дальнейшего развития отношений между Японией и Украиной.

Кусумото: В то время, когда я поступил на службу в МИД, международная обстановка была довольно простой и понятной- мир был поделен на два лагеря: первый- это капиталистические страны, во главе с США и вторая группа- это страны соцлагеря, которые ориентировались на СССР. Однако, 20 лет назад с распадом СССР, холодная война между Россией и США закончилась. Я считаю, что после этого события мировое политическое устройство значительно изменилось. Сейчас все говорят об эпохе глобализации, что означает свободное перемещение людей, капиталов и товаров между странами, невзирая на национальные границы. Однако, я убежден, что у процесса глобализации есть свои положительные и отрицательные стороны. Плюсы ее в том, что она способствует экономическому развитию, хорошим примером чего служит КНР. Тем не менее, у глобализации есть и свои минусы- а именно: расслоение общества. В рамках государства это означает расслоение общества на очень богатых и очень бедных, а в мировом масштабе- это разделение стран на богатые и бедные. Я считаю, что это негативная сторона глобализации. Я думаю, что и

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

в наших отношениях в Украине, этот факт тоже следует учитывать. Мне кажется, что в условиях такой непростой международной обстановки, перед японской дипломатией стоят 3 задачи, требующие своего достижения:

Первое, — это дипломатия мира. Японии следует прилагать больше усилий для продвижения мира и стабильности во всем мире. Это первое направление.

Следующее направление- это экономическая дипломатия. Это подразумевает необходимость создания условий для устойчивого развития мировой экономики, чтобы жители всего мира могли вести достойное существование.

И, наконец, третье- это культурная дипломатия. Об этом неоднократно говорилось уже на сегодняшнем форуме, повторюсь - внешний мир проявляет большой интерес к японской культуре. Поэтому я считаю, что и в области культуры, дипломатам есть над чем поработать. Убежден, что у Японии и Украины есть много областей для сотрудничества в вышеупомянутых трех направлениях дипломатии.

Мне хотелось бы затронуть еще пару моментов касательно взаимоотношений Японии и Украины. Кем то уже было отмечено сегодня, что следует еще более углубить наши отношения. А для этого необходимо осуществлять политические и дипломатические обсуждения, особенно на высшем уровне. Поэтому я, как представитель МИД Японии, очень признателен г-ну Нисимуре, присутствующему сегодня здесь, который в бытность своей работы помощником министра иностранных дел, приложил немало усилий для развития диалога между нашими странами. Он провел немало встреч с официальными лицами Украины, — встречался с Президентом, Премьер-министром, но что касается визитов японских чиновников или депутатов на Украину,- следует признать, что их количество находится пока не на должном уровне. Поэтому я бы пожелал, чтобы теперь уже представители Японии почаще бывали бы на Украине с визитами.

Кроме этого, я считаю, что для дальнейшего развития взаимоотношений с Украиной, Японии следует продолжать оказывать содействие для того, чтобы на Украине установилась стабильность и было достигнуто экономическое благосостояние. На данный момент Украина все еще продолжает находиться на стадии переходной экономики, и я считаю, что для преодоления этого, ей необходимо изменить менталитет, а также изменить систему, что довольно непросто. И мне кажется, в этом плане Япония должна вносить свой вклад в форме подготовки квалифицированных кадров, или в сфере перестройки системы, для чего усилий одних только политиков будет недостаточно, Японии стоит объединиться на всех уровнях и прилагать усилия всем вместе.

И в заключение, хотелось бы дополнить слова депутата Нисимура, что отношения Японии и Украины — это не просто отношения двух государств, оказание Японией поддержки Украине несомненно повлечет за собой благоприятный эффект на отношения Японии с Россией, Евросоюзом и США. Напоследок добавлю, что в этом плане, взаимоотношения Японии и Украины имеют большую значимость для японской дипломатии. Позвольте завершить на этом свое выступление. Благодарю за внимание.

Окабе: Большое спасибо. Мы очень признательны Вам, г-н Кусумото, за то что вы пришли к нам сегодня на форум, но пожалуй, еще больше мы признательны Вам за то, что Вы выступаете на обоих языках одновременно (на русском и японском языках). Позвольте еще раз выразить Вам благодарность от лица переводчика и меня лично.

Итак, мы заслушали выступления двух политиков и дипломата, свободно владеющего русским языком. Пожалуй, к этому трудно добавить что-либо еще, тем не менее, позволю себе смелость напомнить, что выражение «государство, испытывающее трудности», озвученное депутатом Нисимура, одинаково

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

относится и к Японии, и к Украине. Поэтому первый вопрос, который я бы хотел задать, относится к г-ну Кожину, бывшему когда-то народным депутатом двух созывов. После этого те, у кого возникнут вопросы, могут свободно задать их. Итак, мне бы хотелось спросить, есть ли у Вас, как у представителя Украины, которая балансирует между крупными державами, какие-либо советы для Японии, или наоборот, какие советы Вы бы хотели услышать от Японии?

Кожин: Безусловно, такие рекомендации есть. Более того, мы уже претворяем их в жизнь. Прежде всего, это поддержание отношений с крупными державами, такой как например, Россия, на взаимовыгодной основе. Я считаю, что как два союзных государства, когда-то входивших в состав бывшего СССР, мы должны придерживаться равноправных отношений, основанных на взаимном уважении. Отношения между Россией и Украиной должны строиться не по принципу старшего-младшего брата, а как уже было упомянуто, на равной основе. Для этого мы стараемся прилагать максимум усилий, однако, следует признать, что на данный момент не все идет так, как нам бы хотелось. Поэтому я хотел бы выразить надежду, что отношения Украины и России будут развиваться в сторону установления равноправных отношений. Еще одно направление, необходимое Украине для дальнейшего развития, это продвижение процесса демократизации. Для этого нам необходимо перенять опыт передовых стран. И, напоследок, я считаю, построение открытого гражданского общества- тоже является очень важным пунктом.

Окабе: Большое спасибо. Сейчас прозвучал ответ от г-на Кожина, если кто-либо желает дополнить, пожалуйста. Прошу Вас, г-н Нисимура.

Нисимура: Спасибо г-ну Кожину, который имеет значительно больший, чем

у меня, опыт работы в большой политике, за столь ценные рекомендации. Действительно, демократия, власть закона и свобода- это универсальные ценности, единые для всего человечества. Я считаю, что для любого государства важно, соблюдая эти ценности, сохранять также и самобытность своей культуры. Желая Вам, чтобы Украина и далее придерживалась этого направления в построении свободного государства. Я думаю, что после Оранжевой революции уровень демократии на Украине значительно повысился, однако уверен, что это еще не предел. На следующей неделе в Киеве стартует чемпионат Европы по футболу, и мне кажется, что проведение данного чемпионата, помимо накала страстей на футбольном поле, принесет также и укрепление взаимоотношений Украины со странами Европы.

В октябре планируются выборы в Парламент. Со времени Оранжевой революции на Украине многое изменилось- в том числе значителен прогресс в развитии масс - медиа, а с повсеместным внедрением сотовых телефонов, интернет-сообщество укрепило свои позиции. Мне думается, подобное изменение породило и «Арабскую весну» тоже. Я надеюсь на переход на следующий уровень в развитии Украины - где решения будут приниматься без какого-либо насилия, но путем свободных выборов.

И последнее, я убежден, что и для Японии, и для Украины, да и для любого государства тоже, стабильность в политике — неотъемлимый фактор развития. К сожалению, Япония сейчас не может похвастаться стабильностью политической обстановки. Скорее всего, в течение года нас ожидают выборы в Нижнюю Палату Парламента, а в июле следующего года,- в Верхнюю Палату, поэтому и своей стране я бы пожелал прихода стабильной администрации в течение года. И тогда мы бы смогли строить наши взаимоотношения как два стабильных государства. Спасибо.

Окабе: Благодарим г-на Нисимура. Думаю, у г-на Кожина тоже есть комментарии на этот счет, но мне бы хотелось сначала попросить г-на Кусумото прокомментировать, и после этого, подытожить- г-на Кожина. Прошу Вас, г-н Кусумото, поделиться своими впечатлениями или комментариями. И, если Вас это не затруднит, дабы наш переводчик немного отдохнул, просьба выступать на обоих языках и далее.

Кусумото: Я согласен с мнением, что отношения между Японией и Украиной на сегодняшний момент недостаточны и есть еще возможности для их усовершенствования. В этом смысле, действительно, крайне важно продолжать курс на развитие туризма, или привлечение японских инвестиций, что уже прозвучало сегодня неоднократно. Однако, для того, чтобы привлечь туристов или инвестиции, Украине, как принимающей стороне, надо прежде всего создать для этого необходимые условия. Поэтому поскольку все мы осознаем, что двусторонние отношения между нашими странами очень важны, пользуясь случаем, мне бы хотелось пожелать Украине, чтобы там были созданы такие условия, которые бы стимулировали приток как туристов, так и японских инвестиций. Спасибо.

Окабе: Благодарим г-на Кусумото. Поскольку времени уже осталось совсем мало, хотелось бы попросить г-на Кожина высказаться вкратце от украинской стороны о своих впечатлениях.

Кожин: Естественно, есть много того, что мне бы хотелось сказать. Прежде всего, на меня произвело огромное впечатление выступление предыдущих докладчиков. Думаю, теперь весь остаток дня я буду думать лишь над этим. Кроме того, я очень благодарен тому, что Япония так глубоко симпатизирует

Украине. Кроме этого, меня тронуло то, что сегодня мы услышали много полезных советов для дальнейшего развития Украины. Я непременно поделюсь этим с моими соотечественниками по приезду на родину, для этого я все законспектировал.

Окабе: Большое спасибо. Поскольку подошло время окончания сессии, объявляю перерыв на 5 мин, и с 50 мин мы начнем прения.

Общие прения:

Окабе: Продолжаем наш форум. На часах 55 мин, мы начинаем наши прения, дискуссии между панелистами планируются на 30 мин, а затем мы перейдем к вопросам из зала.

Сегодня собрались специалисты совершенно различных областей- экономики, культуры, политики и дипломатии. Мне думается, редко можно увидеть, чтобы каждый из экспертов высказывался о взаимоотношениях двух стран под разным углом зрения.

Итак, прежде всего, позвольте задать общий вопрос для всех. Затем, если у кого-либо возникнет вопрос, он может задать его непосредственно тому, от кого хотел бы услышать ответ, или же обозначит тему для всеобщего обсуждения. В этом случае, ответ на него может быть озвучен любым из наших участников.

Итак, прежде всего, общий вопрос. У японской стороны я хотел бы спросить, что они ожидают от Украины, а у украинских докладчиков - чего бы они хотели от Японии, просьба уложиться с ответом в 1 мин. Конечно, это немного абстрактная тема, но я специально не определил конкретную сферу. Вы также можете затрагивать тему взаимоотношений наших стран, или же высказаться о роли своего государства в мире. Поскольку это живая дискуссия, переводчик

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

возможно, будет переспрашивать для уточнения, заранее приносим свои извинения за неудобство. А теперь, хотелось бы начать с украинской стороны. Прошу г-жу Кожину Аллу выступить первой.

Кожина: Прежде всего, хотелось бы выразить благодарность за возможность принять участие в этом форуме. Украина ждет от Японии прежде всего инвестиции, а также новые технологии. Кроме того, не меньшую важность имеет и заключение обоюдных соглашений между ВУЗами наших стран и культурный обмен.

Окабе: Далее, прошу высказаться г-на Гераскова.

Гераськов: Я бы хотел выразить надежду на то, чтобы отношения между нашими странами перешли на новый, качественный уровень. Еще хотелось бы, чтобы отношения между Японией и Украиной укреплялись не только на высоком правительственном уровне, но и на уровне регионов. К примеру, сейчас на Украине проживает около 180 граждан Японии, причем одна треть из них – в Киеве. А в Донецке, где я живу, насколько мне известно, проживает только 1 японец. Поэтому я бы пожелал, чтобы взаимообмен развивался вглубь и вширь, в регионы, а не сосредотачивался только в столице. И, напоследок, я желаю, чтобы данный форум стал первым шагом на пути укрепления наших двусторонних отношений.

Кожин: Отвечу на 3 вопроса за 1 мин. Первое, что мы ожидаем от Японии, – это углубление отношений между нашими странами на уровне гражданской дипломатии. Второе, что мы ждем от Японии- это новые технологии, инвестиции. И кроме того, ближайшими направлениями в развитии наших

отношений является политика, экономика, информация и сельское хозяйство. Спасибо за внимание.

Окабе: Мы прослушали пожелания от украинской стороны, а теперь хотелось бы услышать мнение японских докладчиков, не буду устанавливать порядок выступления, пожалуйста ...(депутат Нисимура поднял руку) Прошу Вас, г-н Нисимура.

Нисимура: Я считаю, что предложения украинской стороны весьма интересны- привлечение японских инвестиций, заимствование наших технологий, региональное сотрудничество... Боюсь повториться, но на мой взгляд, самым главным для реализации этих планов является политическая стабильность. Приведу лишь один пример - с туризмом. Одна из самых благосостоятельных прослоек японского общества- пенсионеры, которые очень любят путешествовать. Они часто путешествуют по Западной Европе, этим их уже не удивить. А вот поток туристов в Хорватию за последние годы увеличился до 100 тыс. чел в год. Этому во многом способствовало и открытие чартерных рейсов японской авиакомпанией JAL в Хорватию. Скоро, я думаю и Хорватия им наскучит, и так как Украина ни в чем не уступает Хорватии, имея столько объектов мирового культурного наследия, о которых уже было упомянуто, считаю, что нам надо продвигаться на восток, и JAL уже подумывает над этим, и я сам тоже постараюсь приложить к реализации этих планов максимум усилий.

Окабе: Спасибо. Далее, прошу г-на Кусумото.

Кусумото: Я тоже согласен с тем, что прежде всего, от Украины мы ждем установления там политической стабильности. Политическая стабильность-

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

это уже относится к внутренним делам государства, поэтому я считаю, что дальнейшая судьба Украины — в руках самих украинцев. Что же касается экономической стабильности, то Япония и впредь намерена продолжать оказывать содействие Украине в этом вопросе. Однако, если бы Украина определила свои приоритеты в дальнейшем экономическом развитии, и предложила нам конкретные планы, я думаю, это ускорило бы процесс экономического содействия с нашей стороны. Кроме того, в вопросе оказания поддержки развитию Украины, заинтересованность проявляет не только Япония, но и страны ЕС. Поэтому возможно, в будущем содействие Украине мы будем оказывать в сотрудничестве с ЕС. В этом плане, я убежден, что Японии и впредь следует оказывать всяческое содействие для устойчивого экономического развития Украины. Спасибо.

Окабе: Далее, прошу выступить профессора Итикава.

Итикава: Прежде всего, позвольте добавить пару слов к тому, что было сказано украинской стороной. На нашем сегодняшнем форуме ключевыми словами выступили туризм, культурный обмен, подготовка кадров. Я считаю, что нам предстоит еще немало потрудиться в области содействия такому обмену, что было упомянуто доцентом Кожиной и г-ном Гераськовым, а именно: такой обмен на индивидуальном уровне требует наличия развитой туристической индустрии. К примеру, депутат Нисимура сказал, что Украина привлекательна с точки зрения туризма, и следует больше рекламировать это, чтобы увеличить поток туристов на Украину. Но, помимо этого, я думаю, очень перспективен и т.н. «медицинский туризм», — т.е. перспективно привлекать украинских туристов в Японию с целью получения высококлассного медицинского обслуживания. Возьмем, к примеру, соседа Украины — Россию, граждане которой

за получением аналогичных услуг предпочитают ехать не в Японию, а в Юж.Корею или Сингапур.

Кроме того, для японцев очень удобно то, что для краткосрочной поездки на Украину не требуется оформлять въездную визу, в отличие от той же России, куда нам приходится оформлять визу даже для однодневного визита. В этом плане я считаю, в отношениях Японии и Украины имеются большие перспективы.

Окабе: Спасибо. Мне кажется, сегодня мы услышали много интересных рекомендаций и предложений, как от японской, так и от украинской сторон. Поскольку время наше уже подходит к концу, пожалуйста, в заключение, если кто-нибудь хочет добавить что-либо к вышесказанному... (депутат Нисимура поднимает руку) Прошу Вас, г-н Нисимура.

Нисимура: У МИДа есть один принцип в реализации японской дипломатии. Украина, имеющая более 50 млн населения, вызывает большой интерес, как огромная держава. С другой стороны, рядом с ней соседствуют страны бывшего СССР- Азербайджан, Грузия, Молдова, также идущие на пути к демократизации. В МИДе эти страны для удобства принято объединять в одно определение- ГУАМ, то есть: Грузия, Украина, Азербайджан, Молдова, с целью концентрации оказываемой поддержки. То есть, даже в плане туризма, хотя Украина бесспорно, привлекательна и сама по себе, но если ее объединить с соседними государствами, также имеющими богатое культурное наследие, то этот рынок туристических услуг значительно расширится. Возможно, Украине, как крупной державе, не понравится быть объединенной с меньшими, чем она сама, государствами, но я считаю, что сотрудничество с соседними государствами, также нацеленными на развитие демократии, имеет очень

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

большое значение. Даже в плане туризма, при планировании своей поездки, удобно было бы посетить сначала Украину, побыть там несколько дней, поскольку это самая большая страна этого объединения, затем поехать в Молдову, хотя там все еще нестабильно сейчас, затем — в Грузию и Азербайджан. Что вы думаете по поводу такой идеи и туристического предложения в частности?

Окабе: Вы знаете, специальность доцента Кожиной как раз туризм, поэтому я бы попросил именно ее прокомментировать данное высказывание.

Кожина: Я думаю, что это очень хорошая идея. Особенно важно для Украины налаживание сотрудничества с Грузией, поскольку там с недавнего времени очень активно идет процесс демократизации. Также, поскольку Молдова является нашим ближайшим соседом, сотрудничество с ней не менее важно для нас. В этом смысле, мне кажется, идея объединения в ГУАМ, о котором шла речь, имеет большие перспективы. Более того, очень перспективно развитие именно туризма в регионе ГУАМ.

Окабе: Спасибо. Я вижу, г-н Кожин поднял руку, позвольте попросить Вас покороче, так как у нас совсем мало времени.

Кожин: Я думаю, для всех сегодняшних участников форума самым важным является следующее: во-первых, мне кажется те вопросы, которые были затронуты сегодня на форуме, целесообразно передать для рассмотрения в вышестоящие органы власти. Во-вторых, как я уже упоминал, есть необходимость создания японо-украинского общества дружбы «Киев-Кобе», и его членами считать принимающий нас сегодня университет Кобе Гакуин,

клуб Ротари (который г-н Кожин посетил днем ранее), а также всех участников в сегодняшнего форума. Для этого, я думаю, необходимо и содействие неправительственных организаций. На этом у меня все.

Окабе: Спасибо. Осталось еще много вопросов, требующих рассмотрения, но самое главное, поскольку сегодня прозвучало, что эти вопросы требуют рассмотрения властными структурами, хотелось бы попросить содействия в этом Представителя Правительства г-на Кусумото.

Времени у нас осталось совсем мало, поэтому сейчас хотелось бы послушать вопросы из зала. Приношу свои извинения, лимит времени всего 7 мин, если у кого-нибудь есть вопросы...

Вопрос из зала №1 (обычный слушатель): У меня есть друг, уроженец г. Донецка, ныне проживающий в Киеве, и сам я лично тоже бывал на Украине 6 раз. Доводилось даже останавливаться в «Донбасс Палас» (дорогостоящая гостиница). Так вот, мы с другом хотели бы наладить небольшой бизнес, поэтому меня интересует, будут ли в организации, о создании которой говорил г-н Кожин, рассматривать заявки бизнес-характера?

Кожин: Безусловно. Гарантирую на 100%.

Вовк (украинский бизнесмен, проживающий в Японии): Я думаю, основой основ для налаживания взаимобмена и в частности, бизнеса, между нашими странами, является то, о чем многие забывают- это наличие прямых авиарейсов. Если бы г-н Нисимура замолвил бы слово, чтобы хотя бы раз в неделю было налажено прямое воздушное сообщение, это бы увеличило размеры потока туристов между нашими странами.

Кожин: Мы просим депутата г-на Нисимура непременно посодействовать в этом вопросе.

Нисимура: Обязательно приложу все усилия в решении этого вопроса, поскольку сам заинтересован в нем. Как в случае с Хорватией, все начиналось с чартерного рейса, которым пользовались и туристы, и бизнесмены. В дальнейшем, этот рейс стал регулярным. Раз уж мы создали такое общество японо-украинской дружбы «Киев-Кобе», непременно поедем все вместе!

Окабе: Спасибо. Итак, думаю, следующий вопрос станет последним, я вижу, что девушка подняла руку, прошу Вас.

Вопрос из зала №.2 (обычный слушатель): Я лично мало что знаю об Украине, поэтому мне было очень интересно послушать сегодня мнения стольких людей. И я бы хотела задать вопрос г-ну Гераськову, касательно японской культуры. Вы говорили, что на Украине за Японией закрепился устойчивый образ «Страны самураев и боевых искусств», однако, мне кажется, это не применимо сейчас к современным японцам. Как изменилось Ваше впечатление о Японии и ее жителей, после приезда сюда и непосредственного общения?

Гераськов: Спасибо за вопрос. Скоро будет 10 лет, как я занимаюсь изучением культуры Японии. Поэтому то, что я говорил ранее, о японских самураях и гейшах- это стереотип, сложившийся у простых украинских обывателей, сам же я, естественно, никогда так не считал. Однако, мне это известно, потому что я вплотную занимаюсь этим в своих исследованиях. К сожалению, те мои соотечественники, которые имеют ограниченный доступ к японской культуре,

очень часто склонны создавать такие стереотипы. Поэтому и в этом смысле тоже, очень важно развивать наши взаимоотношения и впредь, поскольку такое общение даже на индивидуальном уровне позволит создать более правильное впечатление друг о друге.

Окабе: Спасибо. К сожалению, несмотря на то, что наша дискуссия стала набирать свои обороты, время, отведенное на прения, подошло к концу. Возьму на себя смелость от лица всех организаторов сегодняшнего форума объявить о его окончании.

После трагедии в восточной части Японии, из Украины в Японию активизировались визиты ученых и политиков в русле «Чернобыль- Фукусима». Однако, что касается попыток узнать друг о друге побольше не только в узкоспециализированной сфере, а комплексно, то надо признать, их недостаточно не только здесь, в Кансае, но и масштабе всей Японии в целом.

Мне кажется, что подобный форум, собравший экспертов различных областей из обеих стран,- это первый опыт в истории Японии.

В этом смысле, мне кажется, что собравшись сегодня здесь, мы стали свидетелями первого шага, имеющего огромное значение для будущего.

Я надеюсь, что количество подобных встреч в будущем будет только расти, а дружба Японии с Украиной ? только укрепляться.

Кроме того, я хотел бы выразить признательность студентам, собравшимся сегодня здесь безо всякого принуждения со стороны университета. Я убежден в том, что подобный опыт участия со студенческих лет в таких мероприятиях международного масштаба, не может не пригодиться вам в будущем. И непременно воспользуйтесь приобретенной сегодня информацией и посетите Украину по окончании университета!

Мы планируем вновь провести аналогичный форум в Японии теперь уже

第3回日本ウクライナ地域経済文化フォーラム<パネルディスカッション>

через 2 года, если это будет возможно. Надеюсь тогда вновь встретиться со всеми вами!

Ну, а теперь, позвольте считать на этом наш сегодняшний форум закрытым. Большое всем спасибо. Надеюсь на то, что мы встретимся вновь, будь то на Украине или в Японии!